

魔法少女リリカルなのは ~the cross of moon light~ 【凍結】

たけのこの里派

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

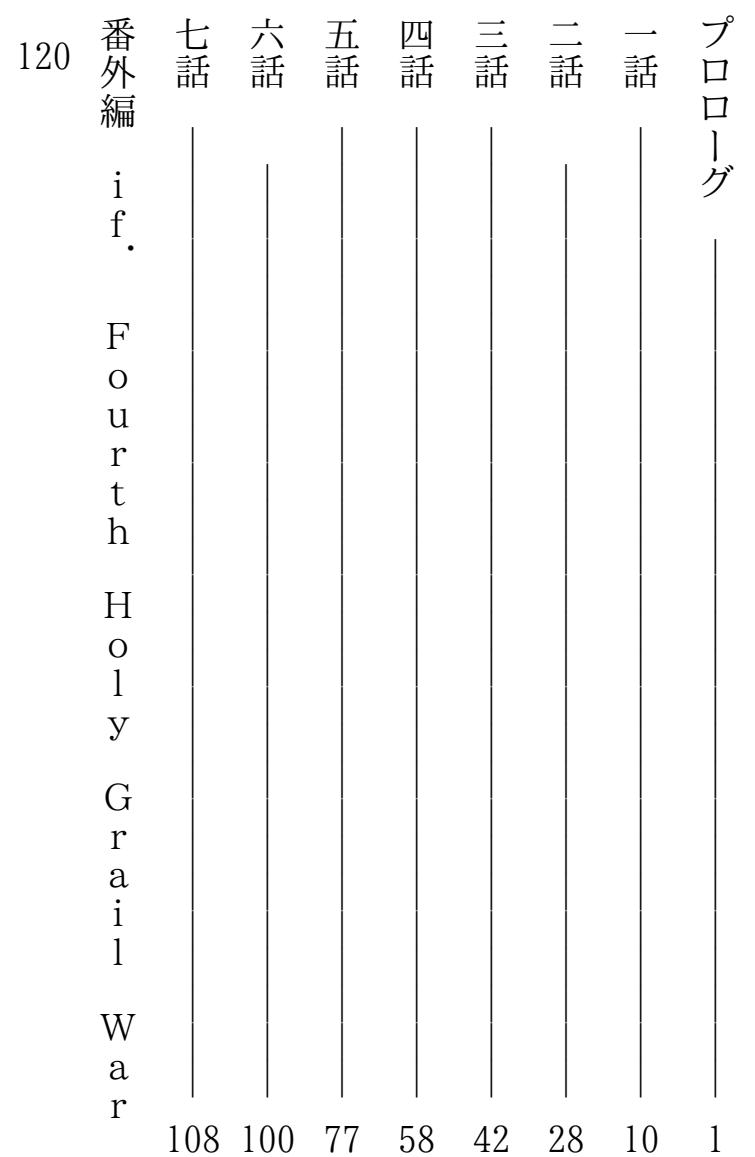
彼は生まれながらの“王”だった。世界を意のままに改変せし力、虹の瞳。それは彼が『朱い月』の後継であるが故。星によつて生み出された、決められた者であるが故。そして千年の時のは後、異なる並行する世界の内の一つ。魔導と科学が合わさつた次元の海に、彼は使い魔と共に舞い降りた。それにより“物語”が新たな可能性を見せる。それは靈長の絶滅と絶望か、それとも幸福か。

魔法少女リリカルなのは the cross of moonlight 始まります。

「ぬああああああッ！　聞いてよゼルえもーん！」

「何だ？　のびライト君。お主をいじめられるジャイアンとかマジ想像できんのだが」  
始まりますツツ!!!

目次



# プロローグ

「うん？　『彼』について？」

とある聖堂教会埋葬機関に所属している『王冠』の二つ名を冠する代行者は、とある存在と深く交流を持つていた。

「それは君達の知つての通り……えつ？　人柄？　うーん、そうだね。確かに彼は『王』に相応しい要素を多く持ち合わせていた。空想具現化。虹の魔眼。でも――」

それは偏に彼が人ならざる存在。死徒と呼ばれる吸血鬼であるが故。

彼の名はメレム・ソロモン。死徒二十七祖第二十位、『フォーデーモン・ザ・グレイトビースト』。しかし二十七祖に名を連ねる死徒でありますながら、死徒の敵対組織である埋葬機関に所属する異端者。

「カリスマとか、多分無かつたと思うよ？　『王』として必要なのは力だからね。

彼、僕が忠誠を誓つた『主』と違つて、恐ろしく俗物だったから」

そんな彼が指す『王』とは、十世紀以上昔、全ての真祖を生み出し人類を滅ぼそうとしたが、『とある理由』で彼の魔法使いに滅ぼされた月の王と、ほぼ同一の存在の事である。

「彼は精神的に君達人間と非常に近く、時には愛し、時には殺した。彼は自分より別格と言つていたけど、あの第一位と第五位と同次元である彼が、僕達以上に人間と異なつている彼だよ？　フフツ。彼がもう少し弱かつたら、あの『紛い物』を殺して間違いなく僕のコレクションにしたかつたよ」

あのガイアの魔犬が居るから、どうせ無理だろうけど、と彼は続ける。

真祖の処刑人である真祖の姫君や、死徒の姫君の様な月の王を元にしたプロトタイプではなく魔眼最上位の“虹”を持ち、更には空想具現化すら操る、月が生み出した完全な後継機。朱い月とは全く違う方向性の精神を持つた、まるで人間の様な新たな『王』。

「でも気をつけてね。彼のお氣に入りに手を出したら、彼は彼の人間性をかなぐり捨てて君達を殺しにかかるから。彼、第一位と第五位と同じくらい君達を殺し尽くすの速いらしいし。

嫌でしょ？『アラヤ』が動かない程度に人類の総数が減るのは」

死徒二十七祖第三位『Brunestud』、新たな月世界の王。

『タイプ・ムーン』『アリストテレス』。

朱い月の正統後継、『赤い月』を冠する原初の一。アルテミット・ワン

——“アーライト・ブリュンスタッド”と、そう言つた。

「ぬああああああッ！　聞いてよゼルえもーん！」

「何だ？　のびライト君。お主をいじめられるジャイアンとかマジ想像できんのだが。

お主の事だ、どうせしようもない事なのだろう？」

「ざつけんなジジイ、こちとら背徳感で自殺も考えたんだぞこの野郎」

「だから何だと言うのだ。ついにあのマキリの娘かアルトルージュにでも夜這いでも仕掛けられたのか？」

「………………」

「お主まさか……」

「ぐあああああああああああああ!!!! いつそ殺してくれツ!!」

そんな彼がこの世界から姿を消し、とある並行世界にて姿を現したのは、この会話の数時間後だつた。



アークライト・ブリュンスタッド。彼は転生者である。

いやイキナリ何言つてんだテメエと思うだろうが、彼は前世の記憶を有して生まれた。だが、問題は彼の生まれた場所と状態と世界であつた。

そう。彼が生まれた、目覚めた場所は地球から38万4,400km以上も離れた月面であつた。

「W h <sup>何</sup> a t i <sup>コ</sup> s T h <sup>レ</sup> i s?」

それが彼の第一声。

いやまあ、一度死んだとは言えただの一般人がイキナリ月面に立つていたらそんな事を言うかもしれないが、幸い彼に対して月は優しかつた。

月からのバツクアップ。それが彼が呆然自失状態から脱した要因だ。

月から流れて来る莫大な知識。

そうして漸く、彼は自身の置かれた状況を理解した。

「ガガーリン、確かに地球は青かつたぜツ……」

勿論暫く現実逃避していた。

時速360km以上で、地球より重力が軽い筈の月面を走り回つたり、空想具現化でネオアームストロングサイクロンジエットアームストロング砲を何台も作つたり、地球には無い宝石の原石掘りまくつたりしたが、数時間後、彼は自身が新たな『月のアリスト<sup>タ</sup>テレス』であることを認めた。目の前の光景（笑）が、彼が現実を認めさせた。「よりにもよつて型月エ…もしくはきのこエ。私利私欲でナチュラルに他人をホルマリン漬けとかする世界かい」

月から得た、自分が生まれた理由は単純明快。

先代の『月のアリスト<sup>タ</sup>テレス』、『朱い月のブリュンスタッド』があるハツチャケジジイにブチ殺されたからである。

勿論そんな事は原作を知っている彼にとつては既知なのだが。

アリストテレスの消失、それに対する防衛本能として彼は生まれた。

現代一般人の人格と記憶を携えるという謎を抱えて。

「あれ？ 朱い月つて、【鋼の大地】で復活するんじゃないの？」

残念ながら、月からの返答は無かつた。勿論きのこなんて居ない。その後彼は、月面での孤独感からの脱却の為に、故郷である地球に降り立ち様々事を行つた。

朱い月が創り出した千年城跡でトラフィム・オーテンロッゼにイヤモン付けられフルボッコしたり。

生まれたてのアルトルージュ・ブリュンスタッドを引き取り育てる。

。

アルクエイド・ブリュンスタッドの成人の儀に立ち合つたり。

アルトルージュを撃退した死徒二十七祖番外位の初代ミハイル・ロア・バルダムヨオンをブチ殺したり。

史実では火炙りの刑に処されたジャンヌ・ダルクを、コンピエースの戦いで拐う様に助けて色々あつて結婚したり。数十年後、彼女の最

後を看取つたり。

襲い掛かってきた埋葬機関の代行者にトラウマを負わせたり。

アリマゴ島で不完全な死徒となつたシャーレイを死徒にし、更に使  
い魔にして最低限自立出来るよう育てたり。

第四次聖杯戦争後、十年間教育という名の虐待を受け続ける筈の間  
桐桜を助けたり。

三咲市で十八代目ロアに襲われた弓塚さつきを助け、同じくロアに  
殺されそうなアルクエイドを助け、ロアを首を残し消滅させて頭部を  
カレーの人へ渡し止めを刺させたり。

第5次聖杯戦争でライダーに死んだフリをさせ生き残らしたり。  
心臓を奪われたイリヤスフィールの魂を確保、蒼崎燈子の人形にブ  
チ込んだり。

衛宮士郎とギルガメツシユの戦いの最中、固有結界内に乱入して乖  
離剣をパクつて止め刺したりと様々。

そんな彼は、死の淵に追い込まれていた。少なくとも精神的に死に  
かけていた。

そんな彼のそばにいる老人が一人。

キシュア・ゼルレッチ・シユバインオーグ。

現存する『魔法使い』の一人であり、彼の朱い月を滅ぼし代償とし  
て死徒となつた、死徒二十七祖第四位のハツチヤケジジイである。

「先ずは詳しい経緯を教えてくれんか」

「経緯なんてモンねエよ。何時も通りに桜やライダー、シャーレイ  
とアルトルージュと楽しい一日を過ごして寝た。本当に何時もと変  
わらなかつたんだ」

「ふむ」

「だが寝ている最中、下半身に違和感を感じ、目が覚めたら——

——

そう、彼は、

「裸の桜達が、俺の上で腰振つてたんだツ……！」

道徳とか倫理とかもろもろで死にかけていた。  
寧ろ死ね。リア充爆発しろ。

「はあ……別に良いではないか。愛されとる証拠だろうが、この幸  
せモンが」

ゼルレッチが冷たい視線を送るが、アークライトはそんなものを気  
にしている余裕などありはしない。

「ライダー やシャーレイはまだ良いよ！ でも桜とアルトルー  
ジユつて何だ!? 僕にとつては妹みたいな二人だぞ!?

背徳感と罪悪感で死にたくなるわ！  
てか、まだ良いつて何だ、何様だ俺  
「何を大層な……」

「お前にとつて孫同然のアルクエイドに同じことされたらどうすん  
だ」

「…………ツ !!! (汗だく)」

思わずゼルレッチの顔が青ざめる。

死徒二十七組の頂点達は、意外と人間臭かつた。勿論この二人限定  
だが。

「ならばお主、これからどうするのだ。マスター権はマキリの娘にあるが、確かに彼の騎乗兵<sup>(ライダ)</sup>の英靈の魔力を供給しておるのはお主の筈だ。ラインから居場所を特定されたらプライミツツが世界の果てまで跳んでくるぞ？」

「この世界から消えたい……」

顔を隠すように両手当て疲れきった、消耗仕切つた今の彼を見て、おそらく誰もあの死徒二十七祖第三位とは思わないだろう。それほど、彼の表情はアレになっていた。

具体的には、思春期に到達した娘に毛嫌いされた父親の様なアレに。

あり得ないが、おそらく彼の第一位であるガイアの魔犬も、アルトルージュに『プライミツツなんて大ッ嫌い!!』と言われたら同じ顔をするかもしれない。

いやたぶん。

「(末期だのう……) ……解つた。ならば暫く儂が並行世界に送ろう。時が経てば迎えに行く」

ゼルレツチの司る魔法、第二魔法・並行世界の運営。世界に孔を穿ち、その孔を通して並行世界を旅する紛れも無き奇跡。

彼の魔法があれば、確かにこの世界から文字通り『消える』事が出来るだろう。しかも迎えに来てくれる辺り、彼等の仲の良さが窺える。

「マジでツ!? ウツハツ有り難ツ!! 流石魔法使い!! ムシャクシャしてアリストテレスの一角ヌチ殺しただけはあるツ!

そこに痺れる憧れるううう!!」

「貶しとるのかお主」

少なくとも褒めてはいなないだろう。

「此方が1年程経つたら迎えにいこう。

とは言え、此方の時間と送る並行世界では時間軸がズレるとかもしれんから分からんが。まあ大丈夫だろう。

まあ良い、では直ぐ様送るぞ」

「ちよつちよつちよつ、書き置きぐらい残させて！ イキナリ消えたら桜が黒くなるし、アルトルージュがプライミツツをけしかけたらマジ死ねるッ!!」

二人の脳裏に、あの靈長の殺戮者が悠々と並行世界の壁をブチ抜く様が、容易に浮かび上がる。

「ヤベエ、自分から言つたけどマジ想像出来るわ」

「だのう……」

そんな会話をしている内に書き置きを書き終えたアークライトが、手紙をゼルレツチに渡す。

「では送るぞ」

「ああ、俺のささやかな傷心旅行へ」

「何が傷心旅行だ」

「ウツセツ」

ゼルレツチが懐から、宝石の様な剣を取り出す。

この剣こそ、ゼルレツチを魔法使いたらしめる剣。宝石剣キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーラ。

「て言うかジジイ。オマ、自分の名前をまんま剣に付けるとかネーミングセンス終わってんじやねエの？」

「何を言う。カツコイイではないか」  
「マジで終わつてた……」

何の魔力も無かつた剣に、七色の光が灯る。それを振るい、空間に人間大の裂け目が生まれ、

「では、気を付けての」  
「ああ、行つてくるよ」  
「行つてきます！」

その裂け目が、二人を呑み込んだ。

「アレ？」

一人の月の王と、その使い魔の死徒を。

## 一話

第二魔法によつて呑み込まれた暗闇の中に光る、小さな光に向かつて進む。

その光に近付くと、先程の様に光が俺を飲み込んでいく。

そして光が呑み込まれた後に現れた光景は、夜の、日本によくあるような公園だつた。

しかしここが俺の知る様な日本の公園かはまだ判らない。何故ならここは並行世界、俺の居た世界とは異なる可能性を秘めた世界だからだ。

この世界には魔術が無いかもしないし、あるかもしない。死徒がいるかもしないし、いないかもしない。将又単純に『ルート』が違うだけやもしれない。そういうつた相違点を調べなければならぬだろう。

何、俺は10世紀以上昔に似た様なことをしたことがある。慌てる必要はない。風景上現代的なならば、先ずは魔眼を使って戸籍と住所の獲得が必要だらう。

だが、だが先ずそんな事より、俺は問わねばならない。

「何で居んの？」

「えへへっ、私アークの使い魔だもん。どこまでもお供するよ  
俺の横で活発に笑う女の子に問う。

彼女の名は、シャーレイ。ファミリーネームは捨てたとのこと。

ポニーテールにまとめた黒い髪に、褐色の肌。そして何より“死徒”である何よりの証拠の瞳孔が割れた赤い瞳。

故郷のアリマゴ島で、とある封印<sup>衛宮</sup>指定<sup>炬賢</sup>の魔術師の助手だつたが、そ

の魔術師の誘導を受け不完全な死徒となり体が崩壊しかかっていた所を保護、俺が拾つて完全な死徒にし、育てたのだ。

そう、彼女は彼の『魔術師殺し』が冷徹な正義に目覚めた原因の一つとなつた、衛宮切嗣の初恋の女性。

今は十八や其処らの見た目だが、もうかれこれ30年以上の付き合いになる。

俺が保護する前、ただ一人の例外を除いてその島を丸ごと死都にしてしまつた過去を持つ。

まあその島は聖堂教会と魔術協会に潰されたが。

ちなみに彼女が不完全な死徒となる原因の魔術協会に回収された衛宮矩賢の死体は、俺が強奪。魔術回路と魔術刻印を摘出し、衛宮切嗣が持つ二割を除いた八割をシャーレイに移植した。

元々才能もあり、『時間操作』——つまりは時間旅行という第二魔法に傾倒する魔術から、興味を持ったゼルレツチが指導した事と衛宮切嗣の死後、残りの魔術刻印も回収し移植した事も相俟つて、数年前に『時間操作』を完全に習得。限定的故、魔法使い見習いになる（遠坂凜と同様）。

実質、二十七祖の中の下ぐらいは実力もあるだろう。

封印指定を受けた死徒というめずらしい存在でもある。

まあ、固有結界持ちの死徒なら二十七祖には数体いるから微妙だが。

アリマゴ島での一件を酷く後悔しており、以降人を襲つたことは無く、吸血は全て輸血パックで行つている。

無関係な人間、一般人を襲う死徒を憎んでおり、死徒でありながら教会から『死徒殺し』を冠する俺の最初の死徒であり、使い魔であり、家族である少女。

実は封印指定ににも関わらず、メレムから埋葬機関に誘いを受けたりしました。

まあシャーレイは断つたが。

「俺が並行世界こんなトコに居る理由知ってる？」

「うん？ 千年以上生きてるのにヘタレだから？」

「ヘタレ違わいっ!!」

結婚する前のジャンヌのラッキースケベと遭遇した時、何事も無かつたように接したら同じこと言われたけど、断じて違う!!!

「桜ちゃんやライダーさん、アルトルージュさんは兎も角、私はアーヴの奴隸で下僕で相棒なんだから。置いてきぼりは嫌なんだからね」「ぐぬぬぬ…………はあ。アルトルージュか桜が来たら自殺してたかも知れないが……お前なら構わないか」

「あれれく？ それは俺の嫁宣言と解釈していいのかなあく？」

「寝込み襲つた奴が調子に乗るな」

「ごめんなさい。反省はしてるけど後悔はしてない」

「コイツ……ああもう、話が進まん。取り敢えず戸籍作つて寝床確保するぞ」

「それは良いけどアーヴ

「ん？」

「何で子供の姿なの？」

「ビビつて動物が寄つて来ないから」

アルトルージュの真似をしてみました。



月の最強生命体、死徒二十七祖第三位。総ての真祖の原型たるアーヴライトは、存在するだけで動植物を威圧してしまう。強いて言うなら、アーヴライトは月。星そのものなのだ。  
なまじ理性がある人間に敵意や殺気など向けようものなら、目線だ

けで絶望と重圧でシヨツク死させてしまう可能性がある。

本能が敏感な動物が寄つてくる筈もない。

死徒や真祖、魔術や鍊金術、聖堂教会と魔術協会などがあり、神秘性が認知されている前の世界なら兎も角、この世界はやはり全く異なる可能性を持つてているのだ。

もしこの世界が科学、つまりは神秘とは真逆の可能性を歩んだ世界なら非常に面倒な事になる。

人類はすべからく自身と異なる存在を忌避する。それがアークライトになる可能性はあるのだ。

実際アーカライトの正体が衆目にさらされ、人類の敵としてアーカライトが捉えられてしまえば、アーカライトは人類に対し大打撃を与えるなければならなくなる。

それこそ人類がアーカライトに敵対するのが馬鹿らしくなる程の絶望を。人類のアーカライトに対する敵対心を折らなければならなくなる。

それが可能なのは、そんな事があり得るのが『タイプ・ムーン』。アリストテレスの一角、月のアルテミット・ワンなのだ。

しかし、嘗て地球を掌握しようとした前アルテミット・ワンの『朱い月』なら兎も角、一応平穏無事に暮らしたいアーカライトは、そんな『化け物がここに居ます』みたいな本能的な信号をバンバン出すのは御免被りたい。故に力を抑えるために幼年体になつたのだ。  
実質姪、感覚的に妹であるアルトルージュが不安定な力をそうやつて抑えて居たように、アーカライトも実践してみただけ。

「その心は？」

『ハツ、どうだ？ 初めて見るアリストテレスの刀剣解放は』とかしてみたかったからですツ！』

心は餓鬼であるこの千歳児。

その後彼等は、戸籍を作るために虹の魔眼を乱用し、それなりの金

まで手にいれた。勿論、大企業が不正に扱っていた様な汚れ金のみだが、それでも数年は暮らしていける金が手に入つた。

「あの会社の社長、こんなに金貯めてたんだね。最近の日本は怖いよ」

「こんなもん、中世ヨーロッパに比べればカワイイモンだつて。それと、バンビングスつて会社のトコは白だつたなあ」

汚いのはお前らである。

ちなみにこの魔眼とは、外界からの情報を得る眼球が、外界へ働きかける事が出来る物の事だ。

先天的な物もあるが、魔術師などはこれを人為的に、後天的に作り替えた物だが、死徒や真祖。その原型たるアークライトや朱い月も、この魔眼を持、保有している。

しかも朱い月とアークライトの魔眼はこの世に現存する魔眼の中でも最上位。桜のサーヴァントである地母神メドューサの『宝石』すら超える『虹』。

そんなものを『戸籍を作るのが楽』という理由で乱用されでは、並の魔術師ならば例外無く卒倒するだろう。

戸籍の次に住居だが、死徒である前に魔術師であるシャーレイが住む住居ということは、それだけ環境が求められるのだ。

幸いアークライト達が落ちた『海鳴市』は文句無しの一級靈地だった。

特に地脈が流れている土地は四つ。

最大の地脈的好条件は、さざなみ寮という元女子寮なのだが、一般人が共に住む寮に住宅する訳にもいかないので却下。

何より世界が『あそこに死徒とアリストテレスも投入すると手がつけられない』と告げてきていた。

次に好条件の土地は、『月村』という屋敷だが……。

「監視カメラ……多すぎね？」

明らかに日本とは思えない程の重警備によつて遮られていた。魔術的な結界の一つも張られていなかつたので、魔術師では無いと一応判断。

勿論監視カメラも判らない様配置されていたりカメラだけではない。そこかしこに銃が。常人では視認できない赤外線センサーもビツシリと仕掛けであつたりする。

だが、

「フツ、相手が悪かつたな。その圧倒的警備システムによつて張り巡らされたトラップも、ホワイトハウスに面白半分で忍び込んだ経験がある視力5.3万の俺の目は誤魔化せん」

この、隠れた監視カメラに向かつてドヤ顔をしているアリストレスが、根本的に駄ア目な事が再確認された。

残りの二つは、無人の廃墟と化している洋館と、土地が売られているだけの空き地。

アーフライト達は迷わず空き地を選んだ。

「だつてあの洋館、流石に掃除すんの苦労しそうだし」

「どこぞの弓兵<sup>バトラー</sup>じゃあるまいしなあ。

土地があるなら『空想具現化<sup>マープル・ファンタズム</sup>』で一発だろ』

そう言つて土地を購入し、家を建てた彼等の“時は金なり”という言い訳を一応認めておこう。

副音声など聞こえないし認めない。

「今後はどうする？ 最低数年は居るんだし、あの月村つて家には挨拶してたほうがいいと思うけど。

アークの話じや、カタギじやないんでしょ？」

「あの警備システムじゃなあ。入った途端ズドンパツ！ になる」と請け合いだぜ？ 死人出るべ死人。

取り敢えず魔術的要因は皆無だつたけど、この世界の裏情報に詳しいかも知れない。

まあ、また今度出向いたほうが良いだろうな。

——て いうか、何で俺のベッドに潜り込んでんの？ そして何で胸当ててんの？ ドキドキはしてもこの体は反応せんぞ

「いいよーだ。ドキドキしてくれるだけで満足だよ。

うりうりー、桜ちゃんにも負けない自信あるもんねー。  
あー！ ちつちやいアーチも可愛いなーもうつ！」

「訂正しよう。

お願ひします。離れてください眠れません」

「だが、断る（キリツ）

「『親』の命令権使うぞゴラア！！」

そうして、並行世界に来た彼等の始めての夜は更けていった。



「なんなのこの子……」

先程アークライトが寄つた月村邸の一室で、咳きが響かせる二人の女性が存在した。

一人は月村忍。若くして『夜の一族』をまとめる月村家当主を務める女性だ。

もう一人はメイドのノエル。

「こちらのダミーの監視カメラは勿論、恭也様や士郎様も念入りに仕込んだ、素人では絶対に判らない箇所のカメラまで、全て視認しています。」

「素人じや……ううん、そこのらの雑魚じや絶対に無理な配置なのに……それこそ恭也や義父さんクラスの経験と技量を持たないと……」

この月村邸の警備システムはとある御神流の二人の剣士によつて強化され、その侵入難易度は殺人的なまでな領域に達している。不用意に侵入などしたら本当に死人が出るかもしれない程の要塞に近かつた。

それを――、

「それにこの子――、こっちを見て嗤つてる」

カメラの映像に映つているのは、金糸の様な美しい月光色の髪で、こちらを覗いて嗤う容姿端麗な少年。

そのルビーの様な赤い瞳が、一瞬万華鏡の様な虹色に変わつたのをカメラは逃さなかつた。

その美しい容姿も、刺客の可能性があると思うと不気味にすら見える。

「どこの手の者かしら。こんな子供を使うなんて……。

ノエル、この映像からこの子の事を出来る限り調べておいて

「はい。……すすがお嬢様には?」

「そうね……あの子にはもう少し調べてから判断するわ」

彼女には幾つか疑問があつた。もし仮にこの少年が刺客なら、今回顔を見せた理由が判らない。捨て駒にしても見た目が余りに目立つている。

事前に調べて捨てる前に潰してくれと言つてゐる様なものだ。ではそれほどの手練れか。どちらにせよ情報が少ない今は判断がつかない。

しかし怪しい事には変わらない。

寧ろ彼女は警戒していた。

「この子の、この眼……」

七色に輝く万華鏡の瞳など、人類ではあり得ない。それに誰もを惹きつけるこの笑みに、何か生き物として根元的な恐怖を覚える。異質極まりないのだ。

それこそ自分達とも比べ物にならない程に。

「ノエル」

「はい、恭也様にご連絡しておきます」

「トラップの強化もお願い」

「畏りました」

彼女等の中で、映像の少年に対する警戒度はどんどん跳ね上がっていく。

そう、誰も思わないだろう。考えないだろう。

この誰もを魅了する蠱惑的な笑みが、彼なりの精一杯のドヤ顔などと。

思う、筈もない。



「喜べ子猫ちゃんー。絶望しろ野郎どもー。

これから皆の仲間になる袴灯緋月ちゃんです。ことうひつき皆、仲良くしてあげ

てくださいねー」

『はーい！』

「……はああああああああああああ……」

私立聖祥大学付属小学校のとある教室で、溜め息と共に聖杯の泥も吐き出しそうなぐらいどんよりとした、編入生としてのアークライトがそこにいた。

小学校編入。勿論これには理由がある。10世紀以上生きた事もあり、現代の小学校に対して好奇心というのも無くはないが、だからと言つて編入するほどアーカライトも物好きでは無い。

というか嫌だ。

しかしアーカライトは決定的な失策を犯した。

幼年体化という、決定的なミスを。

町を歩けば補導され、道を進めば尋ねられる。

何故こんな時間帯に歩いていたのか。学校はどうしたのか。親御さんの御名前を教え――等々。

魔眼で暗示をかけたからこそ、なんの問題も起こっていないのだが。

「もう面倒臭い。ウザいダルいやつてらんねえ」

彼の精神に凄まじいストレスを与えていた。

これ以上溜まるとムシヤクシヤして『月落』ブルート・デア・シュヴァスター  
世界とし『ぐらいやつてしまふだろう。ガチで抑止力が動く。

そこで現在この世界に唯一存在する家族であるシャーレイは、

「だつたら見た目通り学校行けば良いじゃない。私も高校行きたい

しさ」

そして現在。

「袴灯緋月です。これから数年間よろしくお願ひいたします」  
シヨタコンなら残らず撃墜、通常の女性を年下好きにしてしまい程  
の笑みのアークライトの体から、なんか出てた。疲労感みたいなのが  
が。

理由は勿論、

「(緋に月とか、なんというDQNんんんんんん!!? まんまだけど!!)」

「え、えーっと。袴灯ちゃんの席はあそこなのですよ」

「あ、有り難うございます」

勿論偽名であり、命名はシャーレイ。戸籍上はアークライト・ブ  
リュンスタッフになつていて、勿論学校側には魔眼で暗示をかけて  
いる。が、それでも彼の表情を引き吊らせるには十分だつた。

何より認められなのは、この明らかに同じ小学生にしか見えない  
ピンク髪のこの教師、月読教諭だ。

校長によると、教員免許は勿論、普通自動車免許も取得している、歴  
とした教師である。

アークライトは約千年程生きているが、こんな人間は見たことがな  
い。死徒か、封印指定の魔術師か、何らかの不老不死と言われた方が  
余程納得する。

窓側の後ろ辺りという最高の場所を手に入れたアークライトは、そ  
のままポケットから缶コーヒーを出して飲み始める。煙草があつた  
ら吸い出しそうだ。

その後、何とも言えない哀愁が漂つた空気の教室は、チャイムがな  
るまで授業は進まず、アークライトが月詠教諭に頭を下げていた。  
何だこの小学生。

その後、アーフライトはその容姿、そしてオツサン臭い行動も有り、好奇心旺盛なクラスメイトから質問攻めにあつっていた。

「趣味は何ー?」

「綺麗な髪だねー」

「どこから来たの?」

「ホントに日本人?」

「好きなタイプは?」

「うにゃー、やっぱ至高は義妹に限るにゃー」

「サッカーは好き?」

「ツキyanは何派? 前から派? 後ろから派?」

「先生はどつちでもないです、タイニーズです。エツヘン」

「肉が……」

「目が真っ赤ー」

「明日休みだー!!」

「上条ちゃんは馬鹿だから補修です」

「不幸だああああああああああああ!!」

「どうまとうま! 私はお腹が空いたんだよ!!」

「カツコいいねー」

「小萌先生、最高やでー!」

「どんなスポーツが好き?」

「さつき何飲んでたの?」

質問の言葉と言葉が重なり、最早言語が理解出来ない。

そんな中、救いは勝ち気な金髪の少女がもたらした。

「皆いい加減にしなさいッ! 困つてるとしよう!!」

彼女がこのクラスのまとめ役なのか、瞬く間に質問攻めをしていく。  
少年少女を散らしていく。

「(へえ……)」

アークライトが内心、感嘆の息を漏らす。

ハーフなのか、外人の様な金髪と整った容姿は勿論、小学生とは思えない程ハツキリとしたその強い意思が感じられる瞳は、長年生きているアークライトでもめずらしいだつた。

「(何年ぶりだ？ 十数年前の遠坂凜、もしくは美綴綾子ぐらいか？)」

曾て間桐桜を助けた後、一度見たことがある嘗ての『魔法使い』見習いと、その悪友を。

「にやははは、凄いねアリサちゃん」

「うん。私じや真似出来ないよ」

「えつ……と」

するとアリサ同様質問攻めに参加していなかつた少女が二人やつて來た。

「あつ、私の名前は高町なのは！ よろしくっ！」

「……月村すずか、です。よろしくね」

「ああ、袴灯緋月だ。宜しく、高町。月村」

なのはと名乗つた少女は、アリサであろう金髪の少女よりかは我は強くなさそうだが、活潑で容姿も整つている。まだ『小学生』らしい少女だ。

もう一人の月村すずかは、サラサラの紫がかつた黒髪にカーチェと、二人よりかは大人しい風の、これまた将来美人になろう整つた容姿の美少女だ。紫がかつた黒髪と大人し気な雰囲気が、元居た世界に置いてきた妹同然の娘に似通つてゐる。

「ただ――――、

「(この子、人間か？)」

違和感を感じる。否、違うと断じれるだろう。

強いて挙げるならば、混血に似たり寄つたりの感じもする。

「(『月村』、か……)」

おそらくあの要塞染みた殺人的警備の家の者だろう。なのだとしたらあの屋敷の者が混血のような異能者の可能性が出てきた。

「(『裏』の臭いはしないから無害だろうが、あの地脈のポイント加減は偶然か？　いやまあ偶然なんだろうけど、魔術的要因皆無だつたし……解らぬ)……はあ」

「さつきから溜め息ばかりでどうしたのよ」

アーフライトがまた無意識に溜め息をついていると、見かねたアリサがやつて來た。

「ん？　ああ、私はアリサ・バニングス。よろしくね」

「ああ宜しく。さつきは有り難うな。

つてまた溜め息してたか……ちよつとストレスが溜まつててな、甘味処を探してゐる所だよ。引っ越して來たばかりでよく分かんないんだが」

糖分は頭の血流を良くする。勿論食べ過ぎれば害にもなるが、アーフライトはそんな甘党でも暴食でもない。

冬木市に居た十年間は、特にストレスになるような事もなく、第五次聖杯戦争で不幸に苛まれていた少女達は助けられ自己満足も出来ていた。

ここでアーフライトの前世の原作知識が役立つたのだが、アーフライトは既に千年以上の歳をとつてゐる。前世のことなど殆ど覚えていない。

そんなアーフライトがfateなどの原作知識を記憶していたのは、偏に作品への愛情と世界に対する警戒だったのだが、それでも完全ではなかつた。

事実、第四次戦争戦争には間に合わなかつたし、シャーレイの時も一步遅かつた。

ネタは無意識に口からでるが、その元ネタを尋ねられれば困つてしまふ。故に型月以外の作品の原作知識は勿論、前世のエピソード記憶が著しく欠損していった。

それこそ、『リリカルなのは』を完全に忘れてしまうほどに。

「だつたら、家<sup>ウチ</sup>に来れば良いよ！」

「……はい？」

「成る程」

故になのはが言つた意味を、アークライトだけは理解出来なかつた。

「うん！ 翠屋だよ!!」

「いやだから説明プリーズ」



翠屋。海鳴市で知らない人間こそ少ないと言われる喫茶店である。その店主こそ、高町なのはの両親である高町士郎と高町桃子である。

この二人の間には長男と長女次女が存在する。

まあ長男は桃子の息子では無く、長女も義理が付くが。

この高町桃子はパティシエとしての実力は一級品。愛想の良いイケメンの夫と、（異常な程）若く（見える）美しい妻。人気が出ない訳がない。

しかしこの高町士郎、高町桃子と再婚するまで、旧姓を不破士郎といつた。

永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術という、二刀流の小太刀と体術、飛針、鋼糸などの暗器を駆使する完全な殺人剣というトントデモ流派を修得している。

まあ、10年ほど前に本家が爆破テロを受け、その際にほとんどの使い手が死に絶えているが、しかし高町士郎はそれを生き残り、数年前までボディーガード等の裏の仕事をもっていた紛れもない強者である。

現在は、数年前にボディーガードの仕事で一度意識不明の重傷を負い、回復後、裏から足を洗つたが、その業は衰えていない。

長男の恭也とその義理の妹の美由希も御神流剣術を学んでおり、長男の恭也は父親の士郎と並ぶ程の実力を持つている人外ファミリーである。

まあ例外な妻の桃子や、次女であるなのは、士郎の娘にも関わらず運動が苦手なのだが。

ただここで重要なのは、長男の高町恭也が、月村忍の恋人である、と言ふ一点に尽きるだろう――。

「――ああ、判った。ではこちらは準備しておくから」

『有り難う！　お父さん!!』

娘から電話越しに喜ぶ声が聞こえる。

電話の内容は、編入した友達が甘味処を探しており、それを聞いたなのはが翠屋へ他の二人の友達と一緒に休日の明日に連れてきても良いか？　という物だつた。

返事は勿論是である。

昔士郎が仕事で重傷を負つた際、どうしてもなのはを一人にしてし

まつた時があり、友達もあまり居なかつた。

そんなんのはが友達を連れてくる。土郎にとつてこれ程喜ばしい事は無い。

うち二人はなのはから良く話を聞いているし直接会つたこともある。

まあ、その編入生が男の子という点に置いては、少々親バカ心が動きそうになるだが。

「その袴灯という子は、どんな男の子なんだい？」

故に、娘の印象を聞かねばならない。

『なんだか同い年には見ないの。私が誘つた昼御飯の時も、お弁当を食べてる時何だか遠い目をして溜め息つきながら缶コーヒーを飲んでたよ』

「そ、そとか」

『緋月君が屋上で一人でごはんを食べてたから、折角だし一緒につてことだよ。でもこれからも一緒に食べたいなあ』

「なるほど。良い友達が出来たんだな（しかし既にしたの名前で……恭也が暴走しなければ良いがな。

しかし遠い目をして缶コーヒーを飲む少年……か。随分シユールな……いや、随分大人び小学生も居るんだな）』

心配なのは、少々妹に対して過保護な長男の恭也だ。恭也は土郎が認める程の剣士。その緋月という少年になにかしないか心配なのだ。ぶつちやけ、恭也はシンコンである。

「（なのはと言いアリサちゃんやすずかちゃんと言い、最近の子供は早熟が多い）」

その小学生が実年齢四桁台などと、流石の土郎も想像する事は出来なかつた。

『——でも凄い綺麗な髪をしてるの！　まるでお月様みたいな  
！！』

「——」

しかしそんな思考も、なのはの一言で停止する。

「…………なのは、その子の瞳は何色だい？」

『？　キレイな赤色だよ？』

息子の恭也の恋人の忍が言っていた謎の少年も、月の様な金髪に、  
一瞬万華鏡の様に変化したらしいが、基本はルビーの様な赤色の瞳を  
しているらしい。

偶然、というには材料が揃い過ぎていて。

「……そとか。

有り難うなのは。明日なら大丈夫だ、気を付けて帰つてくるんだ

ぞ

『うん！　じゃあねお父さん！』

通話が切れた電話を置く。

「これは、気を付けなければならないな

そこには家族を愛する父親の顔と、家族を護るために戦う剣士の顔  
をした士郎がいた。

「恭也は、忍君の所か——

士郎は受話器を再び取る。

アーフライトが来るのは、明日の休日の昼間。

私立故に制服着用の学校なのに、校長に魔眼で暗示かけて制服を改造した千歳児の小学生こと、俺アークライト・ブリュンスタッドは、学校が終った夜、月村邸前に再び来ていた。

フツ！ まずは高町の言う翠屋に行くと思ったか？ 残念だつたな、それは錯覚だッ!!!

あ、ごめんなさい石投げないで。

いやだつてアレだろう？ 折角明日甘味（スワイイイイイット）食べに行くんだつて事になつたんだ。まずは当面の用事片付けてから行こうだろう。

てな感じに学校ですすかつちに『今日お前ん家のお父さんかお母さん——というか家主さんに話があるから行つて良い？』つつて、戸惑いながらもすずかは了承してくれたので來たのだ。

ちなみにすずかの両親は既に他界済み。今はお姉さんの忍さんが御当主だそうで。

俺は凄まじい罪悪感に苛まれ、すずかに謝り続けた。

『アークライト・ブリュンスタッド』という存在を造り出したのは『月』という天体だが、保護、教育してくれた存在は居なかつた。前世の記憶が有つた頃なら兎も角。

明確な教育を施してくれた『親』という存在が居ない俺の謝罪は、やはり軽くなるのだろう。

今回の管理者（オーナー）に対しての挨拶でシャーレイは同行ない。複数で行つたらより警戒される可能性があるからだ。それに魔術工房の作成も必要だ。この魔術工房こそ、地脈に拘つた最大の理由なのだ。

それに今日友達になつた月村は普通にエエ子やつたから、家の人もエエ人なのかもしだへんやん。なんて思考もしてしまつ。

それを考えれば、学校に入学したのは正解だつた。月村の家が混血に類じた物であることも、月村すずか自身の人と成りも知ることができた。

「とはいえ、子供の純真さが親に比例するかが問題なんだよなあ……特に魔術師とかは」

頼むから話の解る人が出てきて欲しい。過去の事例でまるで話を聞かない人が多すぎたからだ。

遠野の妹ちゃんはヤダなあ。あの子愛しのお兄様（殺人貴）以外眼中に無いからな。

それにして、彼処はあんまり介入出来んかつたな。一応妹ちゃんの父親を魔眼で暗示固めにし、反転衝動を双子の唾とかショーンベンや唾で解決したぐらいしか出来んかつたし。

しかもそん時にロアとか忘れてたし。思い出したのは随分後だつたからな。

まああのマキリの糞蟲はほぼ見敵決殺（サーチアンドデストロイ）だつたが。あれほど醜悪な悪党は今ではそうは居ない。

魔眼で魔力刻印絞り出させて自壊させて害虫駆除するのに躊躇いはなかつたし、遠慮もしなかつた。比較対象にするのは失礼にも程があるがな。

思わず俺が崩れかけたからな。

ん？ もしかして今まで話の判る奴なんて、メレムか橙子、黒桐君以外居ない？

『——そんな装備で大丈夫か？』

『大丈夫だ、問題無い』

魔力ラインから魔術工房を作つてゐるシャーレイから、ネタを降つ

てくる。

——我汝に問う。右手に持つ物は何ぞや？

茶菓子が入った、時間固定（魔術）で硬めた包装紙で巻かれた小箱。

——A m e n (エイメン)。

「いざ……参るツ」

そんな感じで意氣込んだ俺は、某冬木の虎みたいなノリで月村邸のインターホンを押した。

まあ、前チラ見した遠坂邸にはインターホンすら無かつたのだが。

『——はい、どちら様ですか』

スピーカーから流れた声は、凜とした、しかし何處かあの遠野家に仕える双子の片割れの様な、しかしあまり感情が乗っていない女性の声だつた。

「月村すずかさんのクラスメイトの袴灯緋月といいます。今回はすずかさん関係なく月村の御当主に色々とお訪ねしたい事があり、お伺い致しました」

あの小学校は早熟が過ぎるなど、今日の事を振り返えりながら答えた瞬間、ピーという音が鳴り、扉が開いた。

「入れつてか」

そのセキュリティオートロックの利便性に驚愕しつつ、扉の奥に足を踏み入れる。

そこは玄関なのだろう。勿論一般家庭と比べ遥かにデカイが、コレぐらいは慣れている。

しかし暗い。暗闇とか無問題（モーマンタイ）な俺だつたから良いものの、普通は殆ど見えないだろう。

まあ別に俺は暗闇とか大丈夫だから、迷わず足を進めたのだが、

「へえ」

瞬間、銃声が鳴り響いた。



暗闇の中で宣告抜きの銃撃がアークライトに襲いかかつた。しかしそれは、アークライトに対してあまりに稚拙。

「オイオイ、ゴム弾かよ」

そして本来は避けるのではなく罵<sup>ハラス</sup>と睨んで吹き飛ばすのだが、残念ながらソレをやれば建物が大変な事になる。

ここには話をしに来ただけなのだから。  
だからアークライトは、動くこともしなかった。

銃弾はアークライトに命中せず、アークライトの前で阻まれた。

『——ツ!』

「(成程、善人決定だな)」

アークライトは普段から危険に晒されているて言つても過言ではない。幾ら聖堂教会で不干渉が決められていても、他の機関がちよつかいを出さないとは言えないのだから。事実アークライトも、死徒二十七組の第五位『タイプ・マーキュリー(O.R.T.)』と同じく、様々な機関がちよつかいをかけられてきては撃退している。

それにアークライトに加え、アークライトによつてマキリの魔術刻印を根刮ぎ手に入れ、青崎燈子特製の人形を体とした『架空元素』の間桐桜。

彼女の英靈(サーヴァント)である騎乗兵(ライダー)、地母神メドューサ。

真祖の原型たるアークライトの死徒、『原液持ち』である封印指定の魔術師のシャーレイ。

魔術師にとつては宝（研究材料）の宝庫なのだ。真っ正面から襲つてくる敵など皆無に等しいが、外道な手を使つてくる相手の方がザラなのだ。

銃弾どころか黒剣の嵐やガンドの豪雨は当たり前。アークライトが一人だつた数世紀昔では、N2爆雷級の爆撃が来る時もあつたほどだ。アークライトが軽い気持ちで足を踏み入れたのも、どんな事にも対応出来る自信があつたからこそ。

千三百年の戦闘経験はそれだけ重い。

もしアークライトが全力で逃走を図れば、プライミツツマーダーやORTすら、恐らく逃げ切れるだろう。事実過去に後者から逃げ切つた事がある。

対靈長最強のガイアの怪物（プライミツツ・マーダー）が日本に居る場合は話は別だが、だからといって何時も居る訳ではなかつたし、というかプライミツツが居ると言うことは、アルトルージュと共に居るという意味だ。つまりアルトルージュの護衛の白騎士と黒騎士も居る。

つまり死徒二十七祖が五人。そんな魔境に手を出してくる奴が、まともな手で来る訳がない。

故にゴム弾という『不殺』で来る相手は、アークライトにとつて非常に優しいのだ。

寧ろコレぐらいならアトラクション気分。

「しかしこう言う趣向の遊びは久し振りだなア。ホワイトハウス以来か？ ハハツ」

ジャングルジムを見た子供の様な、そんな足取り手で月村邸を王は進む。



「何よ……アレ……」

月村忍はカメラを観ながら絶句していた。

クレイモア地雷が見えない壁で阻む様に打ち落とされ、銃器は睨まれるだけで分割される。

発煙筒や催眠ガスは室内にも関わらず吹き荒れた風に吹き吹き飛ばされ、落とし穴に至つてはまるで存在しないかのように空中を歩く。

忍も、地獄をとは言わないが、それなりに裏の世界を知ってきたつもりだ。

月村家は、代々『夜の一族』のトップを務めてきた家。

しかしカメラに映る存在は、そんな常識は通用しなかつた。忍が知るそんな非常識がまるで意味を為さなかつた。

「義父さんから連絡が来て、さくらさんや恭也がいるからつて決して楽観視してなかつたとは言えないけど……」

「アレを予想出来る者は、今のところ私のデータには存在しません」忍はチラリと横目でノエルを見る。ノエルは人間ではなく、人形なのだ。

自動人形という、月村家の蔵に未完成なまま存在し、忍が独力で完成させた忍にとつて妹のすずかと同じくらい大切な家族。

しかしそんなロボットと言える非常識も、アークライトに比べれば塵も等しい。

忍やノエルには、アークライトが何をしているのかまるで判らないのだ。

忍は今確かに恐怖していた。

それは自分が窮地に追い込まれる恐怖では無く、トラップを抜けた

先で待機してくれている恋人に危険が迫る事に対して。

恭也は裏でも通用する一流の剣士。それに万が一の為に自分の叔母も居てくれている。しかしそれでも、忍は心配してしまうのだ。

その異質極まりない空気の中、その侵入者の場違いの様に右手に持つ菓子箱が存在していた。



——そしてその刃は、アークライトが落とし穴。クラスター爆弾にクレイモア地雷。ロボット式のゴム弾にスタングレネード。発煙筒に非殺傷の重火器を飘々と潜り抜けた瞬間現れた。

「?」

驚愕したのは、しかしアークライトではなく刃の主。

煌めいた、常人では視認自体が難しい小太刀による一閃を、アークライトは素手で防いだ。

「よーやく人が出てきたらイキナリコレか。最近の歓迎の仕方はコレが通例なのか？ この態度は子ギルでも首ぐらい刎ねるぞ？」

「クッ！」

刃の主は冷や汗をかきながら小太刀を翻し、片手に持つたもう一つの小太刀を素手とは思えない硬さのアークライトの腕を弾いて、反作用で飛び退いた。

「……なるほど腕も良い。見たところ強化の魔術も掛かっていないのによくやる。精々高校生か大学生にしては中々……。だがまあ——」

化物（俺）を殺す剣じやあない。

刃の主は、二十歳前後の黒髪に二本の小太刀を持った美男子。しかしその容姿にそぐわぬ殺氣と猛烈な怒気が、彼を戦士と顕していた。だが彼が纏う怒気が、ただの敵に対する物にしては余りに強いのがアークライトにとつて疑問だつたが、しかし答えはすぐに現れた。

「貴様……何の目的でなのはに近付いた……ッ!!」  
「…………は?」

ただし、今日友達になつたばかりのクラスメイトの名前が出たのは、流石にアークライトでも予想外だったが。

「えつ? もしかして高町のご家族の方? いや、だつたら何だつてこんな紛争地帯も真つ青な要塞屋敷に?」

「俺の質問に答えろッッ!!!」

もし月村家を片つ端から調べ上げたのならば、目の前の彼の発言の意味を理解していたのかも知れないが、魔術師かどうかも判らないクラスメイトの家を調べ上げるのは、中途半端な常識を持つアークライトには遠慮させた。

彼の名前は高町恭也。月村忍の恋人にして高町なのはの紛れもない兄。

「……マジか。これは怪我させて帰えしたらイカンな。折角楽しみにしていたシユーカリームが台無しだ」「飽くまで答えないか……」

「答えるよ。あの子と友達になつたのは全くの偶然だ。それとも小学校でクラスメイトと友人関係になつてはいけないのか?」「偶然だと?」

アークライトとしてはなのはに対し純粋な好意での友人である。

そもそもすずかは混血の匂いこそ漂っていたが、悪意など無く。なのはに至つては少々早熟とは言え、裏の世界など全く関係が無い子供と判断していた。

幾ら過去で、今は亡き妻のジャンヌ・ダルク捕縛の為という口実で進軍して来た、当日10万の十字軍を壊滅させ、ジャンヌを政治道具に利用しようとした高官共を皆殺しにした事があるアーヴィングトだが、流石に無関係な一般人の子供を殺す程外道ではない。

「此方が求めるのは月村当主との対話と交渉。話がしたいたげだ。そこに交戦は含まれない。

故に貴様には用は無いよ、高町兄？」

「高町恭也だ。そんな言い分を信じられると？」

「ならイキナリ切りつけられて正当防衛以外どうすれば良い？」

「……」

「黙つてたら判んねエよ」

「——ツ?!」

気が付いた瞬間、恭也はアーヴィングトに顔面を掴まれ、奥のトラップ地獄（アトラクション）の扉（ゴール）に向かつて、投げつけられる。

物凄い速度で。

「ぐ——あ——ツツ!」

そのままぶつかれば、扉をブチ破り奥の部屋の壁に叩き付けられ、怪我どころか壁の染みになるのだが、勿論アーヴィングトは友人の兄を壁の染みと言う愉快な死体（オブジエ）するのは御免被る。

だからアーヴィングトは王族（ブリュンスタッド）の力を使う。

——空想具現化（マーブル・ファンタズム）。

自身の意思で世界に干渉させることによつて、これを思い描いた通りに変貌させる世界干渉能力。簡易的な『異界創造』。

真祖の中でも王族のみ（一人例外）が使える、王族（ブリュンスタッド）が王族たる最大の理由であり、資格であるチカラ。

精靈を除く、この世で現存する個体でコレを使えるのはアークライトと、亡き朱い月を除いて三名。

真祖の処刑人。真祖の姫君、アルクエイド・ブリュンスタッド。  
死徒二十七祖第九位。真祖と死徒の混血。黒血の月蝕姫。死徒の姫君。アルトルージュ・ブリュンスタッド。

死徒二十七祖第二十一位。海魔スミレのみ。

ただし、コレには欠点が有り、変貌させられるのはあくまで自然のみで、自然から独立した存在（人間）には直接干渉できないという点である。が、たつたそれだけ。利便性は非常に高い。

さて問題だ。

世界を、地上の大部分を占める自然とは、何だ？

——そう、『空気』だ。

先程銃弾を防いだのは、空気を使つて超臨界流体を具現化した物。落とし穴を歩いていたのは、大気中のマナを密集し固定させる事で空中に足場を作つた。

そして今、アークライトは空気を具現化し、風の大砲で扉をブチ破り窒素のクツシヨンを恭也の着弾点に具現化する。

これで人を潰れたトマトにする威力が、精々常人に体当たりされた程度で済む。

恭也が扉の向こうに入つて、風のクツシヨンに命中したのを確認

すると、一跳びで少し離れた扉を潜り、部屋に入る。

「さてと、漸くゴールか」



オリンピックのフルマラソンで一位を取つたみたいなフザけた举动で部屋に入つた俺は、率直に疑問を投げ掛ける。

「さて、ここがゴールかな？ そしてアンタがここ当主か？」

「……ッ!!」

リビングの様な部屋に入ると、先程吹つ飛んできた高町兄を懷抱しているすずかをそのまま成長させた感じの女性と、その二人を庇う様に立つメイドさんがいた。あの女性が月村忍か、すずかも将来あんな美人になるとと思うと、この世界の美形がかなり多いと実感する。にしても随分堪えるな高町恭也君。なんで……ああ、ぶつかつた時のダメージは無いけど、カツ飛ばされた時の衝撃は緩和出来なかつた訳か。

うん、ごめんなのは。

お前の兄ちゃん、全身打撲ぐらいしてるかも知れない。

「にしても何だ……俺が悪人みたいな構図だな」

いや、間違いなく俺は悪くない。菓子箱持ってきた見た目小学生に、あんなトラップ仕掛けた上、イキナリ斬り付けられたのだ。全身打撲ぐらい勘弁してくれ。

俺は悪くない。だつて俺は悪くないんだから。

「侵入者は悪いと思うわよ？ 侵入者さん」

ナチュラルに思考に入ってきた声と共に放たれる拳を屈む事で避け、そのまま背後の存在から距離をとる。

殴り掛かつた女性は……『ピンク』の髪をした二十歳ぐらいで、スタイルの良い女性だつた。

ハツ！ 高々ピンク髪程度、小萌先生という未確認宇宙外生命体を担任を持つ今の俺が、動搖すると思つたか！

「さくらさん！」

いや、別に殺しても良いなら腕を振るつて終わりなのだが、それは戦場だけ。他所様の家で血溜まり作るとかイカントですたい。て言うか明らかに月村さんの人だと思うので論外だ。

「チャイム鳴らして解錠された門から入つた子供を侵入者扱いとはなア。随分鬼畜な世の中になつたモンで。いつの間にか理不尽となつた日本の常識に殺意を覚えた、まる」

「子供は侵入者用の迎撃のトラップをあんな理不尽な方法で突破しないと思うけど？」

「コッチは話がしたいだけなんだけど？」

「よくぬけぬけと!!」

さくらさんと呼ばれた女性が、まるで獣の様に俺に飛び掛かり、爪を振るつてくる。確かに膂力は人間と比べるとあり得ないほど高い。が、如何せん俺にしてみれば『死徒程度の膂力しか無い』という悲しい評価になつてしまふのだが……つて、

「何だその犬耳はツ?!」

「アラ？ 人狼のハーフを見るのは初めてかしら!!」

「イツちゃん印象深かつた混血がトンデモ妹キャラだつたんで、獣系は新鮮なんだよ」

犬耳の女性の突き出した腕の手首を掴み、女性の足を自分の足で掬い上げながら腕の関節を折るようにして地面に叩き付ける。

「逆腕絡み……だつたか？」

「ガはツ!？」

「体のスペックに頼りすぎな人は、搦め手で来られたら大変だぞ？」

「貴様！」

「援護します」

ビフォーアフター風に解説してたら、高町兄が復活。腕からブレード付けたメイドさんを引き連れてきた。

更に女性と同時に攻撃を仕掛けてきて面倒臭くなつたので、鎖を具現化。三人を拘束する。

「なつ!?」

「一体、何処から――!?」

空想具現化は本当に便利だ。

風による窒素装甲（オフェンスアーマー）や超電磁砲（レールガン）の再現とかマジ感動した。

「ノエル！　さくらさん！　恭也!!」

「これでそちらの戦力は封じた訳だけど、どうする？」

「ツ！」

彼女の怒りで目が赤く染まる。フム、なるほどアレが月村の特性能。殆どビジュアルが死徒か真祖と同じ。まあ戦力的には月とスッポンだが。

「その程度の魔眼の暗示なら俺には効かんぞ？　俺に対抗したりや『バロール』でも持つてこいや」

「!?　此方の手の内はバレバレって訳？　一体何処のハンターよ貴方……!!」

ハンター？　この世界にもあんだな。聖堂教会や魔術協会の痕跡は無かつた筈だが……まあ良い。

「つーかよ、俺としては怒つてもイイと思つてるんだ。いきなりのトラップ地獄に剣士、果てはわんわんおわんわんおだ。……後の口上はさつき言つたよな？」

「まるで貴方が敵じゃないみたいな言い様ね。すずかに近付いてお

いて、よく言う……」

「だから偶然だと言つてはいるだろうが。そもそも何であんなに警戒されてたのが激しく気になるんだが……ただの問答では誤解を解くのは難しいみたいだな。

——だから少々強引にでも話をさせてもらう

「…………？」

「人生は『重要な選択肢の連続』って見方も有ることだし、早速選択して貰おう」

後になつて忍さんに聞いた話だが、その時の俺の眼は普段の赤眼では無く、代わりに、

「——さてここで選択肢だ。三人を解放して俺の持ってきた茶菓子頬張りながら話を聞くのか、このまま俺の話を聞かずにこの三人の首が飛ぶのか——」

「——ツ」

思わず見惚れてしまう様な、呑み込まれて仕舞うような、

「五秒で決めろ」

虹色の万華鏡の様だつたそうだ。

## 三話

「俺が月村に来た理由は、ぶつちやけただの挨拶だけだ」

脅迫という名の強要をし、月村邸のリビングのソファーに座ったアーライトが口にした言葉に、月村忍と綺堂さくらはズッコケ、肩を落として盛大に溜め息を吐いた。

ちなみに高町恭也は、別室でノエルの治療を受けていた。やはり打撲ぐらいはしていた様だ。

「……トラップの数々を破壊しつくして恭也君や私を攻撃しておいで、挨拶したかつただけ？」

「オイオイ。常識的なな来訪をしたにも関わらずトラップの嵐。それでも自衛するなど？ 本気で言つてのなら呆れて物が言えんな。今すぐ同じ状況に叩き込んで同じ言葉を吐けるなら納得するが？」

「む……」

つまりは正当防衛。法律的にも常識的にも、打撲程度なら正当防衛で済む。

それに忍はアーライトが恭也達に手加減をしていたことを理解している。

忍には何をしたか全く解らなかつたが、まるで流星の如く壁にぶつかつて打撲傷で済んでる事が何よりの証拠だ

「新参者が管理<sup>オーナー</sup>者に無断で街にふんぞり返つてると思われたくなかつたから来たんだが……」

「……ハア。誤解とは言え、私達が過剰反応し過ぎたつて訳？ 後数日調べられたら……いえ、どつちにしろ私達には対抗出来なかつたわね」

「ンな気落ちする必要は無いだろう。自惚れで無ければ、地上で今俺に対抗出来る奴なんざ精々二、三体ぐらいだろうに」

アーライトの脳裏に白い巨大犬としか形容出来ないガイアの魔犬と、一度挨拶に行つたら寝惚けて殺されかけた巨大な蜘蛛の形をし

た、水晶としか形容出来ない同類アリストテレスを思い浮かべる。

そして最後は、面白い悪戯を思い付いた悪餓鬼の様な笑みをしたウルトラジジイを。

「ああ。そういうえば、すずか嬢は？　アレだけ五月蠅くしたら流石に判る筈かだが？」

「すずかは今日ファリン——もう一人のメイドと一緒にアリサちゃんの家に泊まっているわ。一応避難させる為に。アリサちゃんに申し訳無かつたけど」

「……悪い」

「別に構わないわ。此方も鋭敏になりすぎたのが悪いんだし。

それに二、三体……ね。じゃあコツチも一つ聞いていいかしら？」

「一つと言わず、幾らでも」

「——貴方、一体何？」

忍の質問に、しかし答えるべきアークライトは悩む様に口に手を添える。

「……色々呼ばれてるが、それは俺と言う存在を指すには正しいか判らない。月から来訪した宇宙人？　千年を生きる化物？　月が生み出した王サマ？　確かに間違いじや無いが、意味が解らないだろ？　だから単的、率直に、俺が何なのか伝えるにはコレが一番だと思う」

——並行世界もから來た化物もだよ。



——アリストテレス。

遙か未来、地球は人間の手によつて滅び、殆どの生命は死に絶えていたが人類はまだ生き延びていた。そんな人類を滅ぼす為、ある日突然やつてきた謎の生命体の総称がアリストテレス。名前は哲学者から取つたとされる。

その存在が知られる様になつた原因は、地球が自らの死後も生き延びている人類に恐怖を覚えたことに起因する。

地球としては、自らが生み出した人間達の手で死を迎えることは自らを滅ぼした生命も地球と共に死ぬ為許容出来たが、その後も生き延びている人類に対して恐怖を覚えた。

そして死ぬ寸前に「どうか、いまだ存命する生物種を絶滅させて欲しい」とSOS信号を発信し、星の意思を受信した各惑星の星の意思が自らの星の生態系の最強種＝星そのものを派遣したのだ。

その正体は各惑星の最強の生命体。アルテミット・ワンとも呼ばれる他天体という異常識の生態系における唯一最強の一體。

星の意思の代弁者であり、その星全ての生命体を殲滅できる能力を有する存在。その星の生命種の王。

それは地球のガイアやアラヤの様な、星が生み出した一つの抑止力の形である。

それこそが彼等、地球のSOSサインを聴いて来襲してきたのは太陽系惑星九種と月一種の計十体。

——タイプ・マーズ、火星のアルテミット・ワン。

——タイプ・ジュピター、木星のアルテミット・ワン。

——タイプ・ヴィーナス、金星のアルテミット・ワン。

——タイプ・サターン、土星のアルテミット・ワン。

——タイプ・ウラヌス、天王星のアルテミット・ワン。

——タイプ・ネプチューン、海王星のアルテミット・ワン。

——タイプ・ブルートー、冥王星のアルテミット・ワン。

しかし他の二種は、その遙か以前に地球に来訪していた。

『約束の日』の五千年も早く地球に到着し、と言うかそもそも呼べれたらかどうかあやしいにも関わらず西暦以前に南米に落ちてきた存在。ドジつ娘捕獲にやつて来た先代死徒二十七祖第五位を瞬殺、捕食し吸血種としての能力があると判明して空席となつた第五位を引き継ぐことになつたアリストテレス。

——水星のアルテイメント・ワン、タイプ・マアキユリー。死徒二十七祖第五位、『ORT<sup>オルト</sup>』。

——そして、地球が人間の誕生に不安を覚えた時、その意思を受信して地球を守るためという名目で地球に降り立つて協力を持ちかけた。全ての真祖のオリジナルとなつた生命体。

真の目的は何にも無くなつた自分の國<sup>月</sup>の代わりに地球を自らの領地として掌握することを目的とし、しかしガイア・アラヤどちらにも属さない自分はいずれ双方の抑止力から廃絶対象となることを悟り、そこで地球のシステムに即した後繼者<sup>器</sup>を作ろうとして、その試行錯誤や実験の末死徒二十七祖を生み出した。死徒と呼ばれる吸血鬼を生み出した元凶であり、地球掌握一步手前まで行つた張本人。

——タイプ・ムーン、月のアルテミット・ワン。朱い月のブリュンスタッド。

しかし彼は、とある一人の魔ウルトラジィ法使いに滅ぼされた。

そして彼が滅ぼされた1400年前から百年後、奇跡と偶然と一つの星の意志と運命の悪戯によつて、新たなアリストテレスが誕生した。

それが——。



「……」

流石に予想外なのか、忍が手を抱える様に頭に添える。  
さくらは怪訝な表情をしながらアークライトの方を睨んでいるが。

「並行世界ですつて？」

「パラレルワールド。例えば量子力学のエヴァンゲリエットの多世界解釈。宇宙論のベビーユニバース仮説もだつたか？ 後はシユレディンガードの猫ぐらい知つてるだろ」

「仮にそんなものが有つたとして、どうやつて行き来したのよ」

「1400年前にソレを運営することの出来る様になつた、問題ばつか起こすジジイが居るんだよ。見付けたのは偶然だが」

彼の魔法使いは、本当に問題しか起こしていない。アーカライトの彼への評価は『だいたいコイツのせい』である。

「じゃあ何？ 貴方は剣と魔法が溢れたファンタジー世界から來たつて言うの？」

「いやいや犬耳のお嬢さん。<sup>フロイライン</sup> 並行世界つつても、世界觀は同じ。違ひなんて歴代総理大臣や各国の首相がチョイちょい変わつてるか、細かい町や市が違うだけだからな。

表は

犬耳——さくらが、少々馬鹿にした風な台詞を口にする。しかし残念ながらそんなキャピキャピしたファンタジーは存在しない。  
珍しいという理由だけで、他人をホルマリン漬けとかを平氣でやる  
ようなキャピキャピ感なんて嫌すぎる。

「表……つまり裏は」

「その前に確認だ。表はつつても、裏がコツチとは違う保証がある訳じやない。だから裏に詳しそうだから聞きに来たんだよ、お嬢ちゃん」

「お嬢ちゃん呼ぼわりは止めてくれないかしら。貴方歳幾つよ？」

「さつき千年とか言つてたけど……何で小学生やつてるのよ」

「そんなことはどうでもいいだろう？　たかが千年や其処らの若造捕まえて。こちらには不老不死の一人や二人、居なかつたのか？」

「不老不死……ッ！」

「不老不死。死者蘇生に次ぐ、人類が最も求めた願望の一つ。そして同時に唯一つの例外を除いて人類が到達出来なかつた願望の一つだ。それを一人や二人などと言つてしまふのは、やはり世界と年季の違いか。」

「不老であり、アリストテレス特有の『死の概念が無い』という特性故、第三魔法に次ぐ文字どおり不老不死を自称していい数少ない不死者と言えるだろう。」

“生きているなら、神様だつて殺して見せる”とヤンギレヒロインに言わしめた直視の魔眼ですら、殺害不可能な存在だ。と言つても、先代朱い月の様に物理的に完全に破壊され、消滅させられたら終わりなのだが、その点を踏まえれば第三魔法は不老不死に不滅が付くだろう。

「後者は誠に遺憾だが、こうしないと動物が寄り付かねエんだよ。元々はちゃんと大人やつてるぞ？　苦手なんだ。違和感撒き散らしながら街を闊歩するのは。だからこんなガキの姿をしてる。だが世間体的に学校に通わなきや駄目だつたんだよ」

アーライトが本来の青年体で歩けば、裏の人間ならば必ず気付かれる。匂いがブンブンなのだ。

行き交う人々に紛れ込もうとしても、明らかに失敗してしまう、ま

ともではない者の匂いが。

まあそれ以上に、良くも悪くもアークライトの容姿は目立つのだ。  
街中を平然と歩いていたアルクエイドと同じ様に。

「判るか？ そ、いら歩くだけでおじさんおばさん。お姉さん二  
ちゃん。警官婦警。お爺さんお婆さんがひつきりなしで補導して  
くる。アレを一週間続けたらキレて何もかもブチ壊しちまいそ、うだ」  
言葉を重ねる毎にアーカライトの表情が険しく目に光が消え、それ  
を見た忍達の背中に恐怖と言う名の寒いものが走った。

実際問題これは冗談や比喩ではなく、本気で海鳴市が地図から消え  
ていただろ。何よりアーカライト自身にやつてた自信がある。

まあ、冬木市の様な英靈溢れる街や、三咲町の様な人外溢れる街な  
らば、この違和感はある程度許容されるのだが。

そもそも一般人の精神体がアリストテレスの肉体に宿り続け、影響  
が出ない訳がない。

アリストテレスはどの種も凶暴性が非常に高い。それはアーカラ  
イトとて例外ではなく、アーカライト自身に強いストレスや心的  
ショックを与えてしまえばその凶暴性が表に出てくる。

普段明るく、ふざけた物言いをするのはアリストテレスの本能とも  
言える凶暴性を抑え付けるために無意識にしていると言つてもいい。  
『何ソノ厨二設定。「クッ、お前は出てくるな……！」とかやらな  
きやイカンのか……？』と、地味に頭を抱えていたが、正確には二面  
性が強いだけなのだが。

過去に一度だけ、アーカライトはその凶暴性を自らの意思で全開に  
した時がある。それが何の為かは、容易に予想出来るだろう。

結果、十万の十字軍の命が一瞬で消えたのは、言うまでもない。

故にアーカライトは本気では戦えない。抑止力の事もあり、地球上  
で本気を出すことは殆んど不可能なのだ。アーカライトは何の理由  
も無く人を殺す獣にはなりたくない。自身が紛れもない化物と理解  
していても。

——生誕直後と同じ様に振る舞うのは、別に理由があるのだが

。――。

「俺はこれでも一応平穏で適度に刺激のある暮らしがしたい。だが裏の情報がない以上、何かに襲われても対応策が出ない。だから答えるわせだ。裏世界の大体の情景を教えてくれ」

「……」

忍は思考する。彼の話には筋は通っている。彼が警戒しているのは未知の脅威だ。そして此方への敵対心も無い。何より、嘘を吐き私達を騙しても彼にはメリットが無い。先程見せた力で蹂躪すれば良いのだから。

「……貴方は、『夜の一族』って知ってる?」

「いや、初耳だ」

「そう、貴方の言葉を信じるなら知る訳無かつたわね。

夜の一族つてのは、人類の突然変異が定着した吸血鬼の種族の総称なのよ。優れた容姿と明晰な頭脳、高い運動能力や再生能力、あるいは心理操作能力や靈感など数々の特殊能力などの、本来人間には備わっていない様なものを生まれ持つ存在の」

故に自分達が優れた種とし、一般人を見下す傾向を持つ者も存在する。勿論人間と共存を臨む者も居る。

「そんな能力の代償なのかしら。体内で生成される栄養価、特に鉄分のバランスが悪いの。そのバランスを保つために人の、特に異性の血が必要なのよ」

「……吸血鬼というより、吸血種だな」

「そうね。御伽話で出てくるような吸血鬼を見たことが無い私では判断出来ないけど、夜の一族の絶対の共通点よ。つまり夜の一族は例外無く吸血鬼<sup>種</sup>なのよ」

「そこの犬耳ちゃんは吸血鬼っぽくないが、吸血犬か?」「犬耳ちゃんは止めてくれないかしら……」

「だが断る」

さくらが隠していた犬耳をダラリと垂らしながらゲンナリする。

見た目小学生にそんな呼ばれ方をされると、流石に恥ずかしくなる。しかもその小学生が自分より遥かに歳上ならば尚の事。

「ああそうだ。一応敬語使つた方が良いかしら？ 貴方はかなり目上の人間になるんだし。全然見えないけど」

「いいよ、どうせこの姿じゃ違和感が溢れるしな。でも一応元の姿に戻つたら敬語とか検討してくれ。年寄りのなけなしの威厳が失われる」

忍とさくらが、その元の姿が非常に気になるのは仕方がない。まあ、元の姿で口を開いて仕舞えば今と指して変わらないのだが。黙つていれば朱い月と同等の魅力があるというに。

「しかしさつきハーフって言つてたが……」

「私は吸血鬼の父親と人狼の祖父を持つワーウルフヴァンパイアなのよ。」

「は？」

随分軽く人狼の名前が出てきた事に如何にアークライトでもそれは流石にスルー出来ないと驚愕を隠せなかつた。

「（げ、幻想種だアあ？）

幻想種とは、通常知られている生命の系統樹からは外れている、いわゆる『伝説上の獣』。『魔獣』『幻獣』『神獣』のランクがあり、魔獣ランクならば未だ未開の地の奥深くで発見できなくはないが、幻獣ランク以上のものは既に世界の裏側にシフトしてしまつているという、存在そのものが異常である者もいる。文字通り物語や神話に登場するような生き物だ。

デュラハンやペガサス、ドラゴンや神牛。人狼もソレにあたるだろう。

しかし昨今に於いて、幻想種は殆んど姿を見せなくなつた。アーカライトも、精々ライダーのペガサス位しか見たことが無い。

しかもこの世界に於いての吸血鬼との混血。そんな激レア物の混血種ミックスだ。驚愕しない訳がない。

勿論こんな思考は非常に失礼極まるのだが。

しかしさくらはまた違つた想像をしてしまつたのか、表情を暗くす

る。

恐らく血のせいで迫害、差別、苦悩した事があるのだろう。

アークライトはそんな人間を腐るほど見てきた。

「ああ、差別とか嫌悪とか皆無だと先に言つとく。吃驚しただけだから。と言うか化物度合いは俺の方が遙かに上だろ」

「そ、そう？　いえ、別に何でもないわ」

そんな様子に気が付いたアークライトがフオローをいれると、何でもないと振る舞う癖に、明らかに嬉しそうにする。少し顔が柔らかくなつて、尻尾を嬉しそうに振つてているのが証拠だ。

「（何この可愛い生き物）な、なるほど。コツチの吸血鬼や混血とはちと違う訳だ」

「吸血鬼も気になるけど……混血？」

「かつてヒトならざるものと交わつて血と力を得た人間の末裔だ。ぶつちやけ先祖帰りの異能者だよ。

ソツチみたいにそんな全體的能力向上とかじやなく、一機能特化型と思つてくれて構わない」

「へえ……それは色々能力に種類が存在するつて事？」

「ああ。俺が知つてんのは、有機物・無機物如何に拘わらず、視認した対象の熱を任意で奪う能力や、対象を燃やし尽くす能力とか。能力は一族の血が濃いほど能力が高まつてて、近親相姦を繰り返してゐる。まあ普通に他人と結婚した例も勿論あるがな」

アークライトが語るそのあまりに超能力然なチカラと家庭事情に、忍とさくらの顔が引き攣る。

仮に夜の一族屈指の実力を持つさくらと混血が相対した場合、十中八九混血が勝つだろう。

相性が悪いと言うのも有るが、混血の中には白兵戦で英靈とタメ張れる出鱈目な存在もいるのだから。

そして夜の一族に吸血という欠陥が有るように、混血にも欠陥が存在するのだが、今は止めておこう。

「月村家は、夜の一族の総まとめ。裏の世界の事実上のトップと言つた処かしら。だから色々狙われるのよ。そのせいで過剰反応しちやつたんだの。

そして後は退魔師やHGSって呼ばれる結果的に超能力の様な力を使えるようになる病氣。大体はこんな感じかしら。

後は龍ロつて組織があるけど……」

「精々神秘性は退魔師ぐらいか……。退魔師の詳細は?」

「私が知つてるのは悪霊などの魔の除霊や討伐ね。殆んどが悪霊相手で、たまに妖怪もつて話も聞くけどそれは滅多に無いわ。詳しい事はノエルに聞いて」

「……判つた。有り難う」

——その後、恭也の治療を終えたノエルが戻つてき、退魔師の名門一族は日本警察にも繋がつてている等の話を聞いたのだが、

「(――それだけか?)」

アーフライトの感想はそれに尽きた。

聖堂教会の様な絶大な戦力を有した神様オンリーの異端討伐組織も無ければ、魔術オンリーで派閥争いが下らなさすぎる魔術協会も無い。夜の一族の様な強者もいるが、アーフライトが居た世界に比べれば脆弱極まりない。そもそも――、

「――魔術。魔法。根源。魔術協会。時計塔。聖堂教会。アトラス院。死徒。真祖。いずれかに聞き覚えは無いか?」

「うーん。時計塔はイギリスのアレよね? 後は……魔術と魔法つて、あのファンタジーの? 違いが分からぬわけど……後は聞き覚えは無いは」

そもそも、魔術が存在していない可能性すらある。

「(オイオイマジか。ギャルゲーか何かの世界に送つたんじやねえだろうなあのジジイ。平穏なのは結構だが、こうもユルいのは調子が

狂うんだが）

あまりの現状に拍子抜けが過ぎた。

「その程度……つて顔してゐるわね」

「まあな」

「まつたく、貴方が居た……並行世界？ 一体どんな所だつたのよ」

「目的の為ならどんな外法だろうが何だろうが、平然と他者を使い捨て、珍しいし貴重だからと言う理由で人間をホルマリン漬けにする、場合によつては目的さえ遂げられるのなら全人類が死に絶えても構わない探求者共や、人間を餌か食糧にしか見ていない化物共。神の名の元に気に入らない奴をブチ殺す狂信者。一般人に知られたらソイツ等全員が口封じに殺しに来る様な、人間の命が軽すぎる暖かくも残酷な、都合の良い悲劇と喜劇に溢れた世界」

「…………この世界に生まれて、本当に良かつたわ……」

絞り出した様な声を、さくらが捻り出す。忍やノエルは絶句して声も出せない様だつたが、暫くして漸く忍が口を開いた。

「……そんな世界にいたのに、貴方結構軽いわね」

「そんな世界だからこそ、一人ぐらい軽い奴が居ても良いだろ？」

「だからつて戦闘時にふざけすぎよ」

「――何だ？ 『戦闘』して欲しかつたのか？」

忍、さくら、ノエル。そして部屋のドア越しに聞いている恭也の息が呑む。それがハッタリでも嘘でないことが判る。

巫山戯て同然だ。戯れて当然だ。恭也やさくら達との攻防など、目の前の怪物にとつては児戯に等しかつたのだから。

今のアーフライトは全身を拘束されて重りを背負つているのも同然

の状態。そもそもアークライトにとつて戦いとは、本来の姿で周りを気にせず、地上で出せる全力を持つて挑む事を“戦う”というのだ。魔術師でも死徒二十七祖でも魔法使いでもアリストテレスでも無い、ただちよつと人間より強い程度の相手に本気を出すこと自体あり得ない。

忍達は忘れてはいけない。そして確かめなければならない、目の前の存在がどういう者かを。

「……その、その貴方が居た世界で、貴方はどういった存在だつたの？」

正しく理解しなければならない。目の前にいる存在が、何れ程自分達にとつて危険なのかを。

「……言つたろ？　俺をどうにか出来る奴なんて一、三体が精々  
だつてよ」

「…………ツ！」

——地上で三番目になんて人間を絶滅させるのが速い化物だよ



「…………どういう、意味よ……ソレ」

「そのままの意味だが？ 更に付け加えると、地上の動植物全ての生命種を皆殺しに出来るのが二番目に速い生命種も兼任だな。あの良くも悪くも、魔犬は殺人に特化し過ぎて いる。靈長のみなら兎も角、生命種の絶滅なら時間が掛かる筈だ」

「な…………」

忍達の理解が追いつかない。

目の前の子供は本当に何を言っている？

絶滅？ 人類を？

「そ、そんなの……出来る訳が……」

「絶滅案その一。手つ取り早く小惑星クラスの隕石を地球に叩き落とす。」

絶滅案その二。地球の自転を停止させ創成の炎を再現する。

絶滅案その三。地殻変動を利用して大陸同士をピンボールさせる。

絶滅案その四。南極と北極の氷を融かし大陸を残さず沈める。

絶滅案その五。大気中の酸素濃度を7%以下に落とし、又二酸化炭素濃度を15%以上引き上げる。

絶滅案その六。面倒だが一人一人直接殺していく——イカんな、キリが無さそうだ」

「——

冷徹な目をしながらスラスラと出てくる手段に絶句するしかなくなり、忍達は確信する。

やれる。目の前のバケモノは、やろうと思えば間違い無く人類の塵殺し切るだろう。

しかしそれは――、

「勿論やれば、の話だがな。特技人類絶滅つても、実行出来なきや意味が無い」

「……ちなんみに聞くけど、実行する気は」

「ある訳ねエだろ。そんなデメリットしかない行為」

「ほつ……」

実行しようとすれば抑止力<sup>アラヤ</sup>が出てきて、朱い月の二の舞を演じることになる。

アーライトはアラヤやガイア、両方に属していないのだから。

「一応これから関係を続けていくんだ。ヘラヘラしている奴が後々街一つカツ飛ばせる事が分かつたら色々不安だろ？ お嬢ちゃん達には俺の危険性を知つても付き合えるか聞きたかったしなー」

「行き成りカリスマブレイクしたわね」

「元々存在しない物は壊せねエよ。て言うか見た目ガキがカリスマ振り撒いてもキモいわ」

あーやだやだ。と、放っていた威圧感を散らして、テーブルのアイスコーヒーを口にする。茶菓子はとつぐに食べ終えていた。

「つー訳だ嬢ちゃん。俺は恐らく歩く核倉庫みたいなモンだ。そしてその核倉庫はアンタ達とこれから付き合って行こうと思つてる」「……」

「それでアンタ達は、こんな化物を街に置いとくことが出来るか？」

「まつさえ付き合つていくのか？ 付き合つていけるのか？」

「核ミサイル単体じや無いのね……。私達に害意は？」

「否」

「この街の人間に危害を加える気は？」

「否」

「……条件を出せる立場か解らないけど、条件が一つ」

「此方が勝手に住み着いたんだ。構わんよ

――さて、一体どんな無理難題だ？ 裏社会を完全掌握でも望

むか？」

「私の事を『お嬢ちゃん』呼ばわりしない事!!!」

その忍の発言に、アークライトは思わず目をパチクリさせる。現在この星で、最も危険で出鱈目で無敵で最強でなんとも馬鹿馬鹿しい生命体に対して、彼女はあまりにも『対等』だった。

## 四話

月村忍との会談の翌日。アークライトはシャーレイと共に約束通り翠屋を訪れていた。

「お邪魔します」

「おつ邪魔しまーす」

「いらっしゃい緋月君つ！ あつ、えつと……」

「私は義姉のシャーレイ。君がなのはだね？ 話は緋月から聞いてるよ。よろしくなのは！」

「よろしくお願ひします！ シャーレイさん!!」

流石と言うべきか、かつてアリマゴ島で衛宮切嗣とあれほど仲が良くなつた事なだけはあり、シャーレイのコミュ力は凄まじい。

義理の姉という設定は、勿論アークライトと容姿が違すぎるからである。

しかしそんな設定にギョッとしたのが、既に奥にいる次女のすずかを除く月村一家と、高町恭也だ。

アークライトはそれをガン無視し、店の店主だろう恭也を少し大人にした感じの男性に向かった。

高町家大黒柱の、高町士郎である。

「今回お招きいただき有り難うございます」

「いやいや。此方も娘の友達が遊びに来てくれるのは嬉しい限りだよ」

「いえいえ。あ、これつまらない物ですが」

「これはこれは！ ご丁寧にどうも」

見た目小学生と成人男性。その二人のやり取りは、保護者会で出会つた父兄そのものだつたり。何をしているかオマエ等。

「ちよつと！ 遅いじゃない!!」

「まあまあアリサちゃん。落ち着いて」

奥でアリサが催促してくるのに、二人は苦笑し、

「ハハツ。済まないね緋月君、少々長話が過ぎてしまった」

「構いませんよ。この翠屋は海鳴市随一の良店と聞きます。出来れば長い付き合いが出来れば、と。詳しい話はまた後で」

「そうだね。私も話したい事がたくさんある」

知つてゐる者からすれば含みが有りすぎる言葉を交わした後、アーライトは小学生組の席に。シャーレイは恭也や忍達年長組の席へ。

「つたくもう、アンタが遅いから待ちくたびれたじゃない」

「悪い悪い。しかしバニシングスが待ちくたびれる程旨いのか？」此

処のシュークリームは

「あつたり前よ！　なのはのお母さんが作るシュークリームは絶品なのよ!!」

「マジか」

アーライトは眞実シュークリームを楽しみに来たのだ、それがこれ程好評なのは食事前の楽しみが彩るもの。

アーライトは意外とラーメン屋の行列等での味覚向上効果を楽しんだりするタイプなのだ。

「それじゃあ、緋月君とシャーレイさん歓迎パーティー、始めます  
!!

「何ソレ聞いてない」

「まあ良いじyan。楽しそうなんだからさ」



「——なんだ此れは  
「どうしたの緋月君？」

驚天動地。俺の目の前にあるシュークリームの味は、まさにソレだつた。

——旨い、旨い旨い旨い旨い。ものつそい旨いのだよ高尾。誰だ高尾。

桜やシャーレイの料理は勿論旨いが、こういう菓子作り系統ではこれはレベルが違う。二人が菓子を作らないのが原因だろうが。

「旨過ぎる……」

「あら、それは良かつたわ」

声に引き寄せられ、厨房から出てくる女性に視線が行く。

栗色の長髪にエプロンを着たその女性は、なのはを成長させ、女性的、母性的にした美女だつた。

直感が、アリストテレスとしての直感が、千年間死徒と真祖を狩り続け、魔術・聖堂両教会を含むあらゆる敵対勢力と単身で戦っていた経験が、コレを作つたのが彼女だということを告げていた。

俺の全能力よ。変な事に反応するな。

しかし若い。なのはと恭也、そしてタイミングが無かつたため、おそらく自己紹介する為に虎視眈々と此方を見ている三つ編みの高校生くらいの少女も恭也の妹辺りなのだろう。

つまり彼女が話に聞く『桃子さん』ということか。つまり三児の母と言うことか。

つまりアレか？この世界の人間は、個人レベルで『二五〇法』を完成しているとでも言うのか？ウチの担任は論外で範疇外で規格外のソレだが。

「初めまして、袴灯緋月です。噂の高町桃子さんは、貴方ですか？しかし随分とお若い」

「あらお上手ね、ありがとう。初めまして緋月君。私がなのは達の母親の桃子よ」

「意外ね。皆桃子さんの若さにはもつとビックリするんだけど」

「フツ、ウチの担任を思い出せ。アレクラスを見てしまうと早々仰天はしない」

「ああ……」

アリサやすずか、なのはといったクラスメイトのみならず、あの教師を見たことがある者は例外無く遠い目をしていたのは、言うまでもない。

アークライトはその後、暫く小学生組と一緒にいたが、しかしながら会話がガールズトークに突入した辺りから着いていけず、士郎と一緒に『詳しい話』をしに厨房の奥に入つていった。

一方年長組にいるシャーレイは、

「それで？ 貴女は一体何なの？」

「イッエーイ。いきなり詰問だッゼーい」

忍達に睨まれていた。恭也の妹の美由希はそんな兄達に苦笑いを作っているが。

そもそもそうだろう。前日アークライトが自分の危険性を誇張しても解つて貰おうとし、身を持つて納得したのに次の日に姉が出てきたら詰問もしたくなる。

しかしアークライトは士郎と共に厨房の奥に行つてしまい聞けずじまい。ならシャーレイ自身に聞くしかないのだ。

「じゃ、改めまして自己紹介としましようか。

私の名前はシャーレイ。ただのシャーレイだよ」

「ただの……？ 外人なのは肌で解るけど、ファミリーネームは袴

灯じや……」

「あ、アークのソレ偽名だから」

「…………」

シャーレイのカミングアウトに忍の睨みが呆れた物に変わるが、  
シャーレイは何処を吹く風といった様だ。

「アークって言うのは……」

「そ、アークライト・ブリュンスタッド。それが袴灯緋月の本名だ  
よ」

「じゃあ私も自己紹介するね。私は高町美由希、恭ちゃんの妹でな  
のは姉。宜しくね、シャーレイさん！」

「宜しくつ！ でもさんは要らないよ。私も美由希って呼ぶから」

「美由希ッ！」

恭也が声を上げるが、美由希は引き退がらず、

「私は恭ちゃんの話でしかシャーレイ達を知らないけど、シャーレ  
イは私達に別に敵対してる訳じゃないんだよ？ なのにいつまでも  
私達がピリピリしてても意味ないと思う。それに緋月君――  
アークライト君には恭ちゃんやさくらさん、ノエルさんの三人がかり  
でも手も足も出ないんでしょう？ だつたら尚更じゃないかな？」

「む……」

「おお。美由希カツコイイ」

「エヘヘ」

「……本音は？」

「友達になりたかつたからです!!」

忍がポカーンとし、恭也が頭を抱え、シャーレイがクエツションマークを頭にあげた。

「……友達になるのは嬉しいし構わないけど、何で？」

「だつて……その、私友達少ないもん……」

「ああ……」

そう言えばと、恭也が納得する。

美由希はその整った容姿と性格から、本来友人など容易に作れる筈だが天性のドジさ加減が災いし、学校ではあまり友達を作れずじまいである。

唯一とも言える友人と出会えたのは、美由希自身と同等のドジつ娘であることが切っ掛けなのだが。

「那美ちゃん」—— 親友は居るけど、友達はあんまり居ないんだ……だから同世代のシャーレイが友達になつてくれるならつて「判るッ！」 アークの友達は千年単位で歳離れてるし。そもそも友達なんて感覚で話せそうもないしッ。魔術師共は私が封印指定だから襲つてくるしツツ!!

「?」

最早愚痴になつてゐる。

ちなみにシャーレイは既に四十歳を越えており、美由希と同世代では残念ながら無い。

その後二人は、珈琲や紅茶を酒やビールの様に飲みながら日頃の不満や鬱憤を吐き散らしていた。その姿を見て、恭也と忍はシャーレイに対する警戒心を徐々に解いていった。

勿論理由は呆れて。



厨房の奥の、アークライトと土郎が入った部屋は、現在異界と化していた。

別に土郎の親バカ加減が天元突破のバーストリンクしたり、ネオアームストロングサイクロンジエットアームストロング砲が乱立していたと言つた比喩ではなく、神秘に於ける『異界』をアーカライトが『空想具現<sup>マーブルファンタズム</sup>』で造り出したからである。

アーカライトの自宅もコレと同じことがされており、一般的な住宅が魔術師といえど容易く侵入できない、害意が有ればそもそも辿り着けない不可侵の要塞と化していた。

ちなみに、今は亡き妻のジャンル・ダルクが眠る墓は、最早異界を超えた亜空間となつており、アーカライトならば何時でも何処でも足を運べるが、アーカライトの許可無く絶対に入れない仕様になつている。

そして何故アーカライトがそんな事をしているかというと、本来の姿で土郎と話す為である。

「改めて、アーカライト・ブリュンスタッドだ。先程は偽名の自己紹介済まない」

今のアーカライトは、身長が180センチ程に伸び、子供だった姿が大人びたソレになつていた。

「いやはや……コレは驚いたな……」

幻想的で神秘的な、その見るもの全てを魅了するあまりに現実離れした姿は、土郎と言えど呆然となつてゐる。しかしそれが女性にとっては別なのだが。

勿論アーカライトの変わり様や、その容姿だけに呆然としているのではない。

士郎はアークライトの身から溢れる馬鹿馬鹿しくなる様な圧倒感を感じていた。

それは初めて象や、巨大な建造物。巨大な大自然を見た時に似た物だつたが、アークライトのソレはあまりにスケールが違すぎるといった。

——まるで星と対面している様な存在が——

「最近は小学生になつて色々消耗中でござる…………」

——両手で顔を隠して震えていた。

士郎が心の中でコケたのは言うまでもない。

まあ、アークライトの人柄が台無しにしていたのだ。

そんなアークライトに、士郎が小さく笑つてしまつたのは仕方の無い事だろう。

「じゃあこちらも改めて、高町士郎だ。恭也からは私より随分年上と聞いているが、敬語の方が良いか?」

「構わないよ。俺も基本敬語使つてないから。子供は兎も角、三十路越えてる(忍から聞いた)奴には友人と話す感じにして貰つてるしぱクシヨウ、カリスマが欲スイー」

「ハハハつ。君はそんなものより飄々とした雰囲気が似合うよ。なんとなくね」

「まあカリスマ溢れる俺なんざ、正直キモイだけだろうからな」

「……本当に、ね……」

士郎が普段通りにアークライトと会話する事が出来たのは、偏に

アークライトが威圧感を抑えた故。

アークライトの魅力はその容姿や力では無く、その年月と元来の性格によるコミュニケーション能力、そして一般的な感性だ。

対人能力。他の死徒の様に人からかけ離れた精神を持たず、寧ろ人と寄り添うことが出来る力とも言える。でなければアークライトはアルトルージュは兎も角、シャーレイや桜を育てる事は出来ず、更には小学生をやることなど出来なかつただろう。

アークライトはかつての世界では、『月の王』などと呼ばれていたが（無論本人は悶絶していた）、本人からしては王様ではなく冒険者辺りが望みだつたりする。

「しかし参つた。恭也から話は聞いていたが……これでは最悪刺し違える事も出来なさそうだ。必要も無さそしだがね」

「そんな事を考えていたのか？ まあ忍にも言つたが、害意はサラサラないよ。こんな良い店潰したところで莫大なデメリットが生じるだけだからな。桃子さんのシュークリーム最高。俺は間違いなく常連になる」

「はははツ！ それは有り難いな」

「そもそもそんな事をしたら、あの可愛らしい友人達に嫌われてしまふだろ？」

アークライトのその表情は、酷く優しいもので、まるで教師が生徒に、親が子に、兄が妹に送るような視線で。それは士郎を安心させるには十分なものだった。

「……良い子だろ？ 僕と桃子の自慢の娘だ。やらんぞ？」

「ソレが素かよ。て言うか歳離れすぎて曾孫以上の域だつて。九歳児相手にどうしろと？ 僕をペドのド変態にしないでくれ。学校も保育士してる気分だぞ？」

その台詞を口にした時のアークライトがいやに汗ばんでいたのは、

士郎の見間違いだつただろうか。

しかしコイツら、この会話の前に子育て談義とかしていたせいで、かなり仲良くなつていた。

「恭也と忍君が出来て、アイツも妹離れできると思つたのだが……」

「ああ、俺もそれで昨日斬り付けられたよ。俺の方は最近シャーレイが俺を舐めきつてる感が拭えなくて……此処等でビシツとしないとなア……」

まあそんなこんなで、士郎とアークライトのファーストコンタクトは極めて無事に成功したのだつた。

「そうそう、何故桃子だけさん付けなんだ？」

「何となく、だな。どうも昔からあの手の人種はさん付けしてしまう。桃子さん、時々黒くなるだろ？」

「ああ……なるほど……」



「アークライト君……そんなお爺ちやんだつたんだ……」

「とまあ私達の実年齢を聞いて、結局同世代の友達は少ない美由希ちゃんだつたのでした」

「何のナレーション!？」

士郎とアークライトが、保護者談義に興じてゐる間、シャーレイは死徒と真祖の在り方をある程度搔い摘まんで忍達に教えていた。つまりアークライトとシャーレイの年齢も。

そしてその吸血鬼然とした在り方に、自身も吸血鬼と自称してゐる忍にかなりの衝撃を与えていた。

元々吸血種である真祖が人間の血を吸い、死体となつた人間は吸血

鬼――死徒となる。そして死徒が人間を吸血すれば――。

鼠算が生まれる。そして大半の死徒達の、人間の餌にしか考えてない思想は同じく吸血鬼である夜の一族とはかけ離れていた。

「そう言えばさ、シャーレイも吸血鬼……死徒つてヤツなんだよね？　太陽光とか大丈夫なの？　今日普通に晴れてるよ？」

そう、死徒は太陽光を浴びると体組織の崩壊が急速する。死徒にとつて太陽は極めて天敵なのだ。

「フツフツフ。美由希、私はただの死徒じゃない。死徒であつて魔術師なんだよ。太陽光なんて、数十年前に克服済みさッ!!」

「おおっ！　シャーレイすごいッ」

「ムフフー♪」

しかしこのどや顔シャーレイ、ただ魔術師だから太陽光を克服できた訳ではない。千年クラスの死徒なら兎も角、未だ百年にも満たないシャーレイが自力で太陽光を克服するのは不可能に近かつた。

しかしここで登場したのが、シャーレイの魔術師としての師、宝石翁キシュア・ゼルレツチ・シュバインオーグ。

千年クラスの死徒にして魔法使いであり、前月の王を気分でブツ殺したハチャメチャなウルトラジジイである。

『儂の弟子が太陽光すら克服出来ぬなど話にならん』

そう言つて地獄のような指導でシャーレイに太陽光を克服させるための魔術を教えたのが彼である。

こうしてトラウマを量産させながらシャーレイは太陽光を克服する術を入れたのだ。

その後シャーレイと美由希のガールズトークは続いた。シャーレイがアークライトに育てられたこと。前の家ではアークライトの妹同然の姪と、シャーレイと同じく桜という娘同然の女性が居ることなど。視点を変えると惚氣話に聞こえるものまでと様々だ。

「で、彼には聞いてなかつたけど、貴女達はどうしてこの街に来たわけ？ 私としては仮面ライダーの戦いにゴジラ持ち出された気分なんだけど。貴女なら知つてるでしょ？」

最早投げ遣りになつてゐる疑問を、忍がシャーレイに投げ付ける。かなり疲れが見てとれるのは氣のせいではないだろう。

シャーレイの話で、昨夜のアークライトの力が非常に手加減したものの出会つたのが解つたのだから。

「うん。だつて私——正確には私達が原因だもん」「えつ？」

「私達がアーカークに夜這いを仕掛けたからだよ」

噴き出した。偶々珈琲を飲んでいた恭也と美由希も噴き出した。忍と恭也はアーカークライト本人から本来は大人だと聞いているが、如何せん子供の姿しか知らないため想像で一番にあの姿が思い浮かんでしまう。

つまり小学生に対しても三人の女性が襲つたという犯罪物の光景を想像をしたのだ。

「…………マジ？」

「うん、マジマジ。結局目的は果たせなかつたんだけど」「な、なんだ。失敗に終わつちやつた訳だ。吃驚させないでよ。いきなり夜這い仕掛けただなんて」

三人が安堵の息を吐く。

「夜這いは成功したよ?」

「どっちなの!?」

忍と美由希は顔を真っ赤にし、恭也はアーフライトに向ける視線を、警戒から同情のソレに変えた。

「夜這いは手段 手段は目  
心の拠り所に成れなかつた」

そんな事は無いと思うけど……

それもそうだろう。端から見てもアーフライトとシャーレイの関係はすこぶる好調だ。忍達は眷属の関係は知らないが、家族としては関係に何も不具合が生じている風には見えない。

「アーツ。千年も生きてるのに、あんまりそういうの感じないでしょ？」

「まあ、確かに見た目通りには見えないけど、精々二十歳ぐらいかな？ 千歳以上の老人には見えないわ。正直不老不死ってのもまだ半信半疑よ」

私は実際に見たこと無いんだけど、昔は全然別  
人みたいだつたつて、アルトルージュ——アーラの妹さんは言つ  
てたよ」

シャーレイはそこで初めて表情を喜から哀しみに変えた。

「機械みたいに無表情で、感情はあるには有つたけど、まるで凍り付いたみたいにどんな事にも動じなくなつたつて」

——どんな事にも——？

「今からずつとずつと、それこそ人権なんて物が無くて、何処もかしこも誰も彼も戦争で人の命が今より遙かに軽かつた時代から、アーヴィングは生きてるんだよ？」

千年。その月日は忍達では想像だに出来ない。

十世紀も時があるのならば、そもそも時代が違う。文化が違う。価

値観が、違う。

「アークは、優しすぎた。アルトルージュさん曰く、理由は不明だけど、アークは精神があまりに現代の一般人に近過ぎていたせいでのんな世の中に耐えられなくなつた」

――――――

「戦争によつて男が女が子供が老人が、殺され犯され傷つけられ泣き喚き、無力にも無情にも無意味に無惨に、理不尽に不条理に不合理に潰され蹂躪され続ける。

平穀もあるにはあつたけど、そんなものはそんな情け容赦の無い地獄みたいな悲劇だらけの時代に、アークは耐えられなかつた。だから心を凍てつかせ、ただただ通り流す事しか出来なくなつたんだつて」

人の争いは尽きない。それこそ今のような時代ではあり得ない国同士の全面戦争も容易に起こつた。

主義の為、利益の為、保身の為、体制の打倒や体制の維持の為、利害の相違の為、権利の為、侵略の為、防衛の為、国の為、故郷の為、女の為、家族の為。

理由なんて二の次の戦争なんてものもあつた。

確かにアークライトは生まれつき絶対的な力を持つている。しかし所詮、当時のアーカライトは肉体的な力しか持たなかつたのだ。所詮一般人の精神しか持たなかつたアーカライトにとつて、それは一体どれほどの地獄だろうか。

前世のエピソード記憶が喪われた最大の理由はその年月ではなく、やはり自分の心を殺した為であつた。自分の心を偽り続けた為であつた。

――――――しかし今から600年前、アーカライトは運命の出逢いを

した。

「そんなアークを変えたのが、ジャンヌさん——アークの奥さんの」  
アークライトとジャンヌ・ダルク。二人が出会ったのは、アークライトのただの気まぐれだつた。

世界——抑止力が人に助力をしている。

契約ではなく、後押し。

そんな前代未聞の現象を物見山で、その人間を見に行つたのだ。

そしてその少女に——アークライトは目を奪われた。  
アークライト自身に問えば、恥ずかしながら一目惚れと述べるかも知れない。

故に名を知り、その少女の末路を知つていたが故に、アークライトは彼女を拐うように救つた。

——彼女を、貴様らのくだらない理由で穢してなるものか——  
——と、彼女がオレルアンの英雄となつた後、コンピエニユの戦いで救つたのだ。

いや、一目惚れした時から見守り続けて、死の危機に扮した時は悉く助けた。  
数年後、彼女と結ばれたアークライトは、間違いなく幸せの絶頂だつた。

「ええっ!? 彼結婚してたの!!?」  
「もうずっと昔に亡くなつたけどね」  
「あつ……」

——不老不死。しかしその重さが其処で生じる。

彼女は、自分が死徒になることを望まなかつた。そしてアークライトも。

ジャンヌ・ダルクはアークライトと結ばれた数十年後、人間として、人として、アークライトに看取られながら息を引き取った。

『——永遠の命程くだらない物はない。それこそ仙人のような人種でなければ、自身を磨耗させ続けるだけ。永遠の命——不死とは、時間という鋼で心を削り取る鑓だ』

限定的とは謂え、不老不死であるシャーレイはアークライトにそう教わった。

「なんでも、あの明るくて時たまふざけたあの性格の、ただの子供みたいな笑みが、ジャンヌさんが一番好きだつたらしいよ」

だからその姿で在り続けた。アークライトが生まれた直後と同じ人格に。何より彼女を忘れない為に。

英靈の座でも、彼女が笑つていられるように。

シャーレイ達がどれだけ強行に出ようが、色仕掛けを仕掛けようが、言葉では何と言つてもシャーレイ達をそういう風に見ることはないだろう。

「アークはジャンヌさんに救われたって、アルトルージュさんは言つてたよ。——でも、彼女はもうアークの傍にはいな  
い」

アークライトは六百年前から一歩も前に進んでいない。アークライトはジャンヌの『理不尽に苛まれている人の救済』という遺言が無ければ、ジャンヌと出逢わなければ、アークライトはシャーレイや桜達を救うことは無かつただろう。

——シャーレイや桜を助けたのは、ジャンヌがそう望むだろうから——

「そう、思い込んでる。私達を助けたのは、紛れもないアークの意志だつたのに。そんなアークの意志が、全部ジャンヌさんに盗られ続けている」

それがアルトルージュは許せなかつた。シャーレイと桜は耐えられなかつた。

「酷い言い方をしちやうとね、アークは彼女に囚われ続けてる。自分から囚われてる。このままじや私は、私達は、彼女と同じ場所には立てない。アークは前に進めない。だから夜這いなんて強行を取つたんだ」

しかし結果は失敗。アークライトはその罪悪感から、異世界にまで姿を消した。アルトルージュ達に対しての罪悪感と、ジャンヌに対しての罪悪感で。

「羨ましいなあ、ジャンヌさんは。自分が死んで六百年も経つてゐに、アークの心の中心にいる」「……そうね。私も恭也の心の中心に居たいわ――」



こうして、高町家主催の歓迎パーティーは終了した。

「今日は楽しかつた。有り難うなのは、恭也、美由希、士郎、桃子さん」

「ありがとねーつ！」

「ああ」

「また学校でねーつ！」

「結局私アーク……緋月君に自己紹介出来なかつた……」「私達は殆んど出番少なかつたわよ」

「まあまあ」

洋菓子

パー・ティー終了後、お土産と御裾分け用に買った翠屋の至宝を手に、シャーレイとアークライトが帰宅した。

「向かいの身元はどうだ？」

「一応素性洗つたけど、魔術関連は間違いなく皆無だよ。一応、別にキナ臭い感じがするけど」

家に入つた二人には、パー・ティーの時の空気を消しており、シャーレイの表情は魔術師のそれに。アークライトは絶対強者のソレに変わっていた。

「二桁にもなつていらない障害持ち子供が一人暮らし。保護者は海外に……」

「しかし明らかに魔力を使つた結界を展開されている。しかも家主は関連無し……か。キナ臭さがブンブンしやがるな」

シャーレイが昨夜月村邸に行けなかつた理由は、確かに魔術工房の製作、及び隠蔽だ。しかしソレだけではなく、寧ろこの『調べもの』が原因だつた。

「ホント、向かいのお宅にあんなもの張つてあると警戒もしたくなる」

「アーケが家を異界化出来なかつたらオチオチ寝れなかつたよ。  
…………で、行くの？」

「行かない理由は無いしな。そろそろ引っ越しの挨拶も行かないとダメだろ？ 断じてつまらなく無い物も用意出来たし」

「そこはつまらない物でしょ……」

その目的地までは一分と掛からない。住宅街の向かいだ。掛かる訳がない。

その家は、ハツキリ言つて普通だ。バリアフリーが施されているが、アークライトが警戒する程の物である筈がない。

家には。

ピンポーンと、ありきたりな音をインターフォンが鳴らし、本来の用途をこなす。

『——はい、どちらさんですか？』

「ああ、近所に引っ越してきた袴灯というモンです。ご挨拶に参りました」

『ああ！ 態々すいません。ちょっと待ってください、今出ます！』

アーフライトが警戒したのは、その家を囲うように張られている結界だ。

アーフライトは結界などの魔術を視覚化させ、イメージによって形にすることが出来る。しかしアーフライトは千年生きているが、こんなマトリックスの様な数字の結界は観たことがない。

そもそも魔術かすら疑わしい。完全なる未知だつた。

開かれた扉から出てきたのは、車椅子に乗った、十才にも満たない少女だった。

「始めて、袴灯緋月です。これから暫く宜しくお願ひします、八神さん」

## 五話

アリサ・バニングス。彼女は平凡とは言えない少女だ。

大企業の一人娘。早熟。容姿端麗、成績優秀。幼いながらもカリスマ性も持ち合わせ、入学当初はハーフであることでクラスに馴染めなかつたが、今ではクラスの纏め役として手腕を振るっている。

まさに絵に描いた様な『天才』である。

そんな彼女には悩みがあつた。

「——魔法少女とはなんやろうな」

いや違くて。

「子供、少女の空想と幻想。一部の偉大なる変態同士の産物だと思うぜい」

「そう。つまり口りによる口りを輝かせる口りの為の究極の一や」

「お前口り口りうるせえよ。そんな俺達は世間一般で言うショタだ

ろうが

「つまりそれは神やん、綺麗な御姉様方にハアハアしながら苛めて頂けるんやな!」

「お前は身長160センチ越えてるから無理だにやー青ピー」

彼女の悩み。それはこのあまりにも個性溢れるクラスに、最近転入してきた転校生が馴染めていない、という物だつた。

「そもそも、最近一番有名な魔法少女ものつて、マスコットキャラが全ての元凶で、奇跡も魔法もあるけどそれ以上に絶望と鬱展開がふんだんに設定されてたんだけど。

俺あのアニメ観てから全ての魔法少女もののアニメとマスコット

キヤラを、疑惑の眼で見ちまうようになつたぞ」

「ほむほむががんばつてたぜい』

「僕は全キヤラ好きやけどねツ!!」

サングラスで髪を金髪に染め上げている、義理の妹をこよなく愛す  
シスコン少年。土帝元治。

青髪にピアスの、小学生にも係わらず身長168センチ。『口リが  
好きなんとちやう、口リも好きなんやで——ツ!!』と豪語した、似  
非関西人。衆知の真性で生粹の変態。<sup>バカ</sup>青髪。ピアス。

一見普通に見える黒髪のウニヘッド、しかし常人を遥かに越えた不  
幸の数々に襲われ、しかしそれが対価と言わんばかりにあらゆる年齢  
層からモテまくり、唯今銀髪スターと絶賛同居中の小学生。神上刀  
馬。

今彼女がチラッと視界に入れた男子三名がコレだ。この有り様に  
身長135センチの『ベテラン』教師、月読小萌が頂点に様々なキヤ  
ラの濃い、悪く言えば超々自己中な集団が、このクラスの現状だ。そ  
んなクラスを纏め上げているアリサは間違いなく優秀だ。強いて言  
うならカリスマCぐらいは有るだろう。

しかし、件の転校生——彼がこの個性に押し潰されている、と  
いう訳では断じて無い。

そんな濃い個性を持つクラスメイトが霞むぐらいに、彼は個性的  
だつた。

休み時間中に彼は教室に居ない。何時も学校の屋上に陣取つてい  
る。すぐに会える。

アリサが屋上に向かうと、彼は何時もの様に小学生が飲めないよう  
なブラックコーヒーを飲んでいた。

「何だ、遅かつたじやないか。待ちくたびれたぞバニングス」

まるで月の様な色の、艶やかな金髪。<sup>ルビー</sup>宝石の様な美しい緋色の瞳。

顔の造形の黄金比と言つてもいい程整つた、しかし不自然さを感じない美貌。やること全てが様になつてゐる（転入当日を除いて）、小学生らしさを欠片も見せない小学生。

榜灯緋月。

まるでアリサを待つてたかのような飄々とした姿で、屋上に居座つていた。その姿にアリサが見惚れてしまつたのは仕方ないだろう。

「べつ、別にアンタを探してた訳じや無いわよ」

「そうかそうか、それは悪かつたな。で？ バニングスは一体何の用だ？ 屋上の風を浴びるのは良いが、もうすぐチャイムがなつてしまうぞ？」

「む……」

アリサの唯一の欠点。それは素直に成れない事。

まあその辺りは『くぎゅう』が全ての原因と言えば終いなのだが。

「ねえアンタ。何で何時も屋上に居てコーヒー飲んでるのよ」

「街を見てたんだよ。ふむ……そうだな……」

彼は屋上から見える景色をチラ見し、

「バニングス。お前は此処から何が見える？」

「そりや、街……海鳴市？」

「その通り。この街は平和で平穏だ。少なくとも今は。……しかし数時間後はそうじやない可能性もある。人間なんだからな」

「……普通じやない？」

「そう。普通だ。だがバニングスは大企業の社長の仕事を継ぎたいんだろう？ ならそういう争い事も知つておいた方が良い。人間何事も経験だ」

「同じ年のクラスメイトに言われても説得力無いわよ」

「そうか？ ハハハ……いや、それもそうか。だがバニングスは立場上危険が生じる可能性がある。例えば誘拐とかな。身代金目的とか有りがちだろ？」

「むう……」

「バーニングスにはそういうフィクション染みた事件がリアルに起ころとも知れない。だったら対処法ぐらい考えて置いた方が得策じゃないか? 例えば——と言つた具合だ」

「……」

彼はクラスに馴染めているか。他のクラスメイトに聞けば殆んど是と答えるであろう。

しかしアリサ、そして月村すずかは首を縦には降らなかつた。  
緋月のソレは、一步引いた様な。言つてしまえば溶け込んでいる  
が、染み込んでは居ないと言つた感じ。

「——そうそう。なのはが体育で芸術的着地法を魅せてくれた  
んだが…………アレは素か?」

「素よ。そしてアレは勢い良くコケただけ。

なのははつて、少なくとも私達と友達になつてからは運動音痴は変わらずよ」

「……上の兄と姉、父親がアレなのにか?」

「うーん、確かに聞いたことが有るんだけど、恭也さんは異母兄妹で、美由希さんは従姉妹で、桃子さんと士郎さんが結婚してなのはが生まれたつて」

「……なるほど。道理で彼女だけが多い訳だ」

「……何が多いのよ」

「さて、何が多いのかな? 少なくとも——」

アリサの特技。それは勘。または直感と呼ばれる類いのモノだ。  
そのアリサの直感が、彼が心底自分達と同じ高さに居るとは思えなかつた。

保護者。まるで先生の様に、自分達を見守つてゐる様な——

「——アリサちゃんああん!! こ、国語の漢文が判らないよー!」「……話をすればなんとやらだな。……しかしこの学校では小学生が漢文なんざ勉強してたな……」

アリサにはそれが、酷く気に入らなかつた。



「いらっしゃい、アークくん。シャーレイさん」

「はツツやてえ！ あつそびに来つたよおつ！」

「よお、邪魔しに来たぞ。ハヤテ」

「ちよ、カタカタ呼びは止めてえな。ウチはあんな廃スペック借金

執事とちやうで。アークくん」

「じゃあ……」

「探さんといて！」

シャーレイが勢い良く押したインターほんで出迎えたのは、茶色のショートヘアで車椅子に乗つた少女。

八神はやて。件のマトリックス結界の家で在宅中の張本人だ。

「今日もこんなに仰山食材持つてきてくれて。おおきにな二人共」「近所の好よしみと思つておけばイイ。元々中坊にもなつてない子供だつてのに、下半身不全なんてデメリットも背負つた上、一人暮らしどかあり得ないから普通。人生ルナティックにも程があるわ。保護者は何処にいやがる」

「イギリスやで」

「アーク、殴りに行つてくる？」

「おう、オラオララツシユを完全再現だ」

「スタンド無しで？」

「……『矢』か『遺体』が欲しい所だな」

「……二人共、通やね……！」

この一人汗を拭つて戦慄して車椅子少女。調べた結果、見事今までの一般人だつた。

ただ、なのはの様に魔術回路が存在していない筈にも拘わらず、気道辺りにかなりの魔力を保有しているのが気掛かりだ。しかもその魔力は、常に搾取され続けている始末。

分かりやすく言えば、昔桜が蟲に魔力を喰られていて、魔術が使えなかつた状態と極めて近い状況だ。

原因は既に解っている。はやての部屋の本棚にあつた、如何にもな一冊の本。

「うつわあ……」

ドン引き。

それが俺の第一反応である。それは魔力をイメージとして視覚化する事が出来る故の反応だつた。

負のベクトルの数百年レベルの概念武装半歩手前。<sup>マイナス</sup> というか、どうして概念武装になつていなか不思議で堪らない程の負の概念が積み重なつてゐる。

一体どれだけやればここまでになるのか激しく気になつたりもしたが、はやて曰くこの本はいつの間にか有つたらしく、装飾が綺麗だから飾つてゐる様だ。

実に怪しい。怪しいニヨイがブンブンするツ。はやての下半身不全も、間違いなくコレが原因だろう。

しかしこの本ははやての出地不明の魔力を搾取し続けるだけで、それ以外は唯の本だ。

一般人への呪いの本。しかしこれ等では、あのマトリックス状の結界は説明が出来ない。

ならばあの結界は何だ？ もし仮にこの本が狙いなら、結界を張るよりも奪つた方が遥かに早い。

考えられるのは、この本が概念武装化するのを待つてゐる——

無いな。ならば放置する理由は無い。  
いや、離せられない？ 何から？ はやてから。

故に……監視している？あの結界は監視の為？しかし敷地内に居る俺はこの結界に見られている感覚はしない。監視ではない？それとも――

「ア——クウうう！——ご飯出来たよ——ツ！」  
「……飯食うか」

今はまだ良い。変化が無い今なら。

俺は数キロ離れてはやてを見ている猫を 虹色の瞳で見ながら踵を返した。

——だから、くだらん真似をしてくれるなよ？

「アーヴ。はやてが翠屋のシュークリームまた食べたいそุดから買つてきてー」

「よろしく  
士郎ント二まで叫き飛はしてやるから カタナルト用意し



アーライトが最終的にパシられる事に決定した同時刻、八神宅から数十キロ離れた林の中。

「ゼエツ！ ゼエツ！」

其処には息絶え絶えの猫の姿があつた。その猫は周りを確認し、人

が居ない」と判ると光に包まれ、猫耳と尻尾が生えた女性に姿を変えた。

猫耳の女性——リーゼロッテは、恐怖から逃れる様に自らの体を抱き締めた。

何時ものように八神はやての監視をしていたリーゼロッテは、はやての最近引っ越してきた近所の友人が、自分の事を覚えないよう念には念を入れて八神宅から数キロ離れて魔法を使って監視をしていた。にも拘らず――

「……眼が、合つた……!?」

否。虹色という、異質で異常な瞳で睨み付けられた。

否 虹色という異質で異常な瞳で睨み付けられた瞬間リーゼロッテは逃げ出した。まるで群れから離れ離れになつた草食動物が、偶々遭遇した恐竜から逃げる様に。絶対強者から弱者が逃れる様に、恥も外聞も無く全力で逃げ出したのだ。

人間とは思えなかつた。

使い魔であるリーゼロッテは、素体である猫の本能を保有している。

その本能が恐怖に『逃げろ』と鳴き叫んでいた。その本能が、自分の主人とあの少年が同じ生き物だと思えなかつた。

仮にその本能が無くとも、管理局で屈指の使い手で近接戦闘のエキスパートである彼女の経験という名の勘が、あの少年が自身の敬愛する主であるギル・グレアムと違う生き物と判断しただろう。

『逃げろ』が『諦めろ』に変わつていただろうが。

「お父様……ツ」

もしあの存在が立ち塞がると言うのなら、自分達の計画は間違いく破綻する。

「先ずはアリアやお父様に連絡して、対策を練らないと……」

この計画は絶対に失敗出来ない。

自分達の悲願の為にも。十年前と同じ悲劇を産み出さないためにも。



「緋月くん？」

「いや？」

「うん。どう思う？」

なのは、アリサにすすかは、アークライトより一足遅くに下校ついていた。理由ははやてに食材を持つていく為というもののだが。まあ人間処か人外離れした膂力を持つているアークライトが、彼女達より速く帰路につくのは仕方がない事なのだが。

そもそも、すすかとアリサは迎えの車という金持ち特有のソレを使えるが、友人と歩きながら下校するという事を望んだ為に、出来るだけ車は使わない様にしているのだ。

「どうつて……不思議な人、かな？」

「私は……お兄ちゃんかお父さんみたいな人だと思う。にやはは、同じ年には見えないかな？」

クラスメイトに対する評価ではまず無いだろう。

「……まあそんな感じか。質問した私だけど、私達つてアイツの事

あんまり知らないのよね

「こ」の前のお茶会は、ちょっとしたらなのはのお父さんと奥行つ  
ちやつたしね

そう。小学校で緋アーフ月の事をなのは達以上に詳しく知つてゐる人間は居ない。しかしその『詳しく』も学校での事を除くとあまり無い。付き合いが悪いという訳ではないのだが、流石に小学生と話を合わせろと言うのは酷だろう。

すすぐがアークライトの事を知らないのは、忍達にアーカライトが口止めしたからだ。

すすぐかは、血味泥の世界を知らない。寧ろ彼女は自分の『夜の一族としての特性』に向き合えておらず、その事が他人——特に友人に知られる事を酷く忌避している。

そういう要因もあって、『彼女が知るのはまだ早い』という判断が忍達によつて下された。

幾ら彼女がアリサ同様非常に早熟であつたとしても、まだ彼女は小学生で、年長にも至つていない幼い子供なのだから。

「……また今度お茶会でもしようかな」

「そうだね！」

「アーフの家がどんなトコか気になるし。つてなのは、此処じやない」

「あつ、有り難う。またね！ アリサちゃん、すすぐちゃん！」

なのはは嬉しそうに、楽しそうに別れ道を進み、家へと走つていつた。

「……私達が友達になつた時も、あんな風だつたね、なのはちゃん」「まつたく、なのはつてばはしあぎ過ぎよ」

「私はアリサちゃんもあんな風に見えたけど？」

「……ふん！」

そして二人も別れ、それぞれの家へと向かう——筈だつた。

——それは、夜の一旅としての勘は、はたまた唯の偶然か。暫く歩いたすずかが、ふと何となく嫌な予感を感じ、歩いていた場所をそのまま戻ろうとした時——、

「——ちよつ、何なのよアンタ達ツ!!!!」

アリサの叫びを聞いた。

瞬間、すすがは無意識に瞳を赤色に染め、凡そ小学生が出せる速度を遙かに越えた脚力で走り、車に詰め込まれたアリサを目撃した。

「アリサちゃんツ!!!」

すすがは叫ぶが、だからと言つて車が止まる訳ではない。

幾らすすがが夜の一族で、一般の小学生と比べ物にならないほど身体能力が高い。しかし所詮子供。ほぼ成人の忍なら兎も角、すすがが猛スピードの車に走つて追い付く事など不可能だ。

しかし、この月村すすが。アリサと同等以上に優秀で、早熟である。そして彼女は、こんな事態で、自分の知る中で最も頼れる存在を知つて いる。

「お姉ちゃんと恭也さんに……ツ!!」

すすがは直ぐ様携帯を取り出した。親友を助ける為にも。

一方、誘拐されたアリサはかなり抵抗したが、やはり小学生に女子供。複数の大人相手にどうすることも出来ず、口をガムテープで塞がれる。

「やつと大人しくなりやがったか」

「コイツの親に電話の準備しどけよ。身代金はガツボリ貰うんだか

らよ」

誘拐犯の言葉で、誘拐犯に対する嫌悪と、父親に迷惑が掛かるのにアリサは苦虫を潰した様に表情を歪めた。

しかしこんな状況だからこそ、アリサはこんな状況に陥る事が判つていたかのような、自分のクラスメイトの言葉を思い出す。

『——誘拐されるテンプレは、車なんかで引つたくる様に捕まる事だな。ぶつちやけ捕まらなければイイというのが最善だが、もし捕まってしまえば先ずは冷静になつて状況を把握しろ』

（……大型車で、実行犯は六人。四人は私を捕まえるのに動いて、内一人は私の腕を抑えている。それに運転しているのと、リーダー的な奴は助手席で何処かに連絡する準備中……）

『次は相手が油断している間に只管確実に逃げる方法や隙を捜し出せ。もし外が見れるなら自分が何処に向かつて居るのか確認もしろ。だが決して犯人を逆上させたりするなよ？』

そしてその隙は案外直ぐに訪れた。

「うおっ!？」

警官に目を付けられるのよりも、目的地に速く着くために猛スピードで信号無視を続けていた車の先に、交差点を歩いている人影が現れたからだ。

（急ブレーキを掛けたら車内が必ず揺れる。その時に車の外に出たら一気に逃げ出せば……携帯で助けを呼ぶ事も……!!）

アリサは非常に優秀だ。誘拐されていても、友人の言葉を忘れず努力している。

しかし、

「構うな」

(————え——?)

彼女は如何せん、一般人で普通の感性の子供だ。どれだけ優秀でも、どれだけ早熟でも――

「マジで行かしやがるよアイツ……二十七組一桁台をパシリに使いやがったよあの娘……ん？」

「轢いちまえ」

その友人が轢き飛ばされて冷静で居られるなんて事は、出来やしなかつたのだから。

「――ツ!!」

「――ツ!!?」

「グシャツツ!! と、およそ本来生き物が出る様なモノではない音が車内に響いき、少年の体が宙を舞つた。

「――ツ!!!」

「――ツ!!!!」

「オイ抑えろ！」

「ちよつとスクラップなモン見せちまつたかね。まああのガキは不運だつたつて事で諦めてくれや」

周りの景色など、その瞳に貯まる涙で見ることは出来なかつた。

――しかし不運と言つてしまえば、彼等はどうしようもなく不運なのだろう。

アリサを乗せた車が走り去つた路上に転がつてゐる少年が、何事もなかつた様に起き上がつた。

「…………今、アクセル踏んだよな？ ブレーキじゃなくてアクセル。しかもバニングスが口ガムテされた上に、押さえ付けられてた様にも

見えたよな？ つまりアレだよな？」

撥ねた人間が人間ならば、彼等はまだ幸せだった。

およそ本来生き物が出する様なモノではない音が車内に響いた？ 少年の強度に耐えきれなかつた車がひしやげた音なのだから、当然だろう。

「——死体決定だ糞野郎」

その日、彼等の命日は決まつた。



手足を縛られ、口を塞がれたアリサが囚われた場所は、連れ去られた場所からかなり離れた廃ビルだつた。

男達は何処かに連絡をしていた。男達の狙いが身代金目当てなら、恐らくアリサの父親だろう。

その間アリサは出来うる限りの方法で脱出を試みたが、いくら同年代と比べ精神的に成熟していようと、所詮は小学生。手足にキツく縛られた繩を解く事は叶わなかつた。

そして男達は電話終えて——、

「良かつたな嬢ちゃん。お前の父親は何の迷いもなくお前を助ける為にコツチの要求を呑んでくれたぜ」

「ツ！」

キツ！ と、憎悪と怒りに染まつた瞳を、アリサは誘拐犯に向けた。友人を、これから仲良く成れるであろう友人を何の躊躇も無く、寧ろ態と跳ねたのだ。

人間が、しかも子供が猛スピードの車に轢かれた結果など、想像するには難しくはない。

「後は金を持つてトンズラすりやあ、お前は助かる話になつてんだけど……お前をそのまま解放すんのは勿体ねえはなあ……ククツ！」

男達の言葉と下卑た目で、アリサは青ざめる。

聰明が故に男達の考えが理解できた、出来てしまつたからだ。

「む——ツツ!!! む——ツ!!!」

「オイオイ、口リコンかよお前」

「ハツ！ たまにはガキのモンも試したくてよ。普通の女とどう違うのか」

男達の中の一人の手が伸び、アリサは絶望を感じる。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!

男達に對しての恐怖と憎悪、これから自分に行われるであろう地獄に対する悲しみ。そして今までの思い出の未練が溢れ出した。

父の事。

母の事。

メイドの事。執事の鮫島の事。

すずかとなのはの事。

「諦めなガキ」

最後に——、

酷く大人びた、何時も飄々としつつも自分を気遣ってくれた、あの少年の事を——。

「————ツ!!」

ブチンッ!! と、アリサの口に貼り付けられていたガムテープが噛み千切られる音が木靈した。

「！」

「…………ハツ、諦めろ？ 諦めろですって？ 実にアンタ達らしい言い草ね」

「…………は？ 何言つててんだお前」

「犯罪に走つて、子供を飜る事しか出来ない、アンタ達みたいなクソツタレのクズの事を言つてんのよツ!!」

アリサは一番近くにいた犯人の一人の手を噛み付き、食い縛つた。

「がああああああ!! 痛つてえ！ このツ」

「きやつ！」

アリサが男に壁へ叩き付けられるが、その眼光は衰えない。寧ろ激しさを増すばかり。

これが、アーフライトが評価した、小さな少女の真価だった。

「私は諦めない!! 希望を捨てない！ この命が有る限り、絶対に諦めてやるものですかツ!!」

しかし、所詮アリサは年端も無い少女。運動神経が優れていても、それは小学生の範疇から越えることはない。

そして遂にアリサは抑えられ、男の手がアリサの胸元を掴んだ。

少女は蹂躪されるだろう。男達の汚ならしく悍ましい欲望に穢されれるだろう

「————最高だ」

その男の手が、腕の関節まで18の肉塊に分割されなければ。

ツツ  
!!

!

崩れ落ちる男を見て、仲間に驚愕と動搖が走る。一体何が起こつた。

誘拐犯の男の絶叫と、腕から出血の噴射音が響く中、パチパチと拍手をしながらその部屋に入つてくる者がいた。

「あ……」

アリサの声が漏れる。

物語にするならば、こんな悲劇に似つかわしくないふざけた程に美しい青年が。

散らした異質が

「いやあ良い、實に。見処のある奴だとは思つていたが、ここまでとは思つていなかつた。ここで見捨てるのは惜しい、實に」

まるで宝石の原石を見付けたような輝く笑みをしてやつて来た。

「……なツ、何だお前。今何しやがつた!!」

「いやはや、まさか午前に言つた冗談半分で言つた冗談が本当にリアルで起こるとはな。しかし、コレじゃあ俺がフラグを建てたみたいになるなコレは」

男達の問い合わせ完全に無視し、アリサのみ見、語りかける。その内容は、アリサの目を見開かせるのに十分だった。

アンタ……

「しかしさつきの啖呵、中々痺れたぜ?」

一一

先程の姿を見られたから、それともその現実場馴れた美貌に見惚れたか。恐らく前者だろうが、アリサの顔が羞恥に紅く染まつた。

無視を競うる青年二才（雄）

無視を続ける貴企に文し返し詰探窓の一人が三回三回押していた

瞬間、誘拐犯の一人が細切れになつた。

と止まれるクソッ！」

震える手で銃口を男に向ける  
しかし男は足を止める事は無い。

く  
来んじやねえええええええええええええ!!

そしてズドン！　と、しかしそんな銃声は上がらなかつた。

「氣安く人に銃口向けるなよ、ウンコクズ」

理田は眞緑引き金が引かれる前に鍔を持っていた男の腕を腕辺りで斬り落とされたからだ。

人に理由など必要無かつたんだが」

男が、ただ手をポケットに入れながら睨み付けただけで。

に陥っていたと思うだけで血管がブチキレそうになる」

「うわああああああ!!」

「やりやがった!!」

悲鳴と絶叫が響き、男達は出口に走った。しかし賽は既に投げられている。

「馬鹿野郎!! 逃げんなテメエ等！ こっちにやガキがいんだ、そいつを人質に――――――」

「そうだ。化物<sup>ヒト</sup>を轢き逃げした上に、化物<sup>ヒト</sup>の友達<sup>ダチ</sup>ラ致つて犯そうとして、逃げられると思つてんのかカス共?」

男の言う通り、男達には逃げ場は無かつた。

「で、出口が無エ……!! ガキも居ねエ!!! どうなつてんだ!!?」

逃げ道である出口は既に存在せず、アリサも何処にも見当たらない。

もし運が良ければ、遺跡の迷宮トラップ宜しくの如く、コンクリートがひとりでに動いたのが見れたのかも知れない。  
だが兎も角、つまり結果だけ言うと、

「俺を故意で撥ねた時点で、死刑確定なんだよテメエ等」

男達には、何処にも逃げ場は無くなっていた。

「ば……化け……」

「小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？」

男達に訪れるのは絶望。そして化物が告げるのは、やり過ぎの正義を掲げる風紀委員長の一言。

「――――――では、殺戮してやるから迅速に死亡しろッ!!」

この廃ビルに、豚の様な悲鳴が上がった。



その後、すすかの証言で警察から先行していた士郎と恭也、美由希は、縛られたアリサが居る、血で出来た入口からアリサまで一直線に伸びる道の有る異様な部屋を見付け、救出した。

助け出されたアリサの言葉は、

「気持ち悪い、吐きそう」

だつたそうだ。

誘拐犯達は肉片一つ発見出来ず、しかし部屋に残された夥しい量の血液が誘拐犯達の物と、容易く予想出来た。

事実アリサの証言で、その血は全て誘拐犯の物とあり、それを実行した者の顔をアリサはショックで覚えていないと警察に供述していた。

ただ、士郎達に対するのみ、『月の様だつた』と溢していた。

その後、アリサは一日空けた翌日に学校に登校した。

誘拐事件はニュースでも取り上げられており、教室ではかなり騒ぎになつたが、しかしそこは纏め役であるアリサの腕の見せどころ。

「――私は聖徳太子じゃないから一度に聞かない！ それにもうすぐH.Rが始まるから次の休み時間まで待ちなさい!! 質問は一人一つだけで、私が答えたくない質問は答えない!! わかった!?」

それで騒ぎはピタツと収まるところ、このクラスは素晴らしいのだろう。

クラスメイトの質問をあらかた答え終えた後、荷物を机に置いた途

端、アリサは屋上に向かつて走り出した。

教室にあの少年は居なかつた。ならば何時ものように、あの場所で珈琲を啜つてゐるのではないかと、そう考えて。

案の定、彼は屋上で珈琲を啜つていた。

「よオバニングス。遅かつたじやねエか。待ちくたびれた——

——

「ぜえいツ!!」

蹴つた。

アリサはなんの容赦なく蹴りを入れた。

しかし少年には容易く避けられる処か、片手で止められたが。

「はツはアツ！ どうしたんだバニングス？ いきなりバイオレンスとは、何か良いことでも有つたのか？」

「あの後吐いたわ。どうしてくれるのでよ」

「音声だけだからマシな筈だが？」

「寧ろ想像が膨らんだわ」

アリサは忌々しげに緋月を睨む。

この少年をそのまま成長させると、あの男性になるのかと。

「で？ どうする？ いや、どう思つた？」

「……何を」

「俺が何の躊躇も無く人を殺した事について」

「ツ」

先日の光景を思い出したのか、アリサは苦々しげに顔を歪める。

「……何であんな簡単に人を殺せるのよ」

「それだけ人を殺してゐるからだ。今の時代、殺人は確かに少ない。だけどそれはこの国の話だ。この街の話だつた。だがひと度外に出でみろ？ 紛争地域なんざ幾らでもあり、そこで人は殺されている。」

「…………

「言つたろ？ そういう事も知つてた方が良いつてよ。世の中が世の中、お前の周りの様に優しい事ばつかじや無いんだぜ」

「……人が殺される事が？」

「理不尽な理由で人を殺す事がだ。まあ小学生に教えるこつちや無いこと極まりないんだがね、状況が状況だつたからな。俺は友人があんな目にあつて頭に来ないほど薄情では無い」

「…………む」

緋月の言葉で今更ながらアリサは思い出した。

自分が助けて貰つたことを。

しかしそれどころか自分はまるで責めるようにしている。

助けて貰つたら何をすれば良いか。そんなことはアリサが知らない訳は無い。

「……が……う」

「は？」

「ツ……助けてくれて有り難うツッ！」

それが素直であることに慣れないアリサが、顔を真っ赤にしながらなのは言うまでもない。

それに爆笑した緋月が、アリサに再び蹴られたことも。

既にアリサの中には緋月が何者なのかという疑問は無くなつていた。

人を殺そうが秘密が有ろうが、彼が自分達に嘘をついていた訳ではなかつたからだ。

自分達と接していた彼は、紛れもなく本物だつたのだから。

そんな、本当に謎に包まれた少年を睨み付けていると、アリサはあることに気が付いた。

「ねえアンタ。なのはやすずかは名前で呼ぶのに、何で私はファミリーネームなのよ」

「高町では土郎達と被る。月村では忍とな」

「だつたら私の事はアリサでいいわ」

少し紅くなつたアリサを見た緋月は、ニヤニヤした笑みを止めて、アリサが思わず見惚れる綺麗な笑みを作り、

「だつたら、俺はアークと呼べ。親しい仲にはそう呼ばせているからな」

少しだけ、本当の意味でクラスに溶け込んだ。

六話

海鳴市の暗闇の夜に、異質な存在が混じつっていた。

金髪に碧眼。民族衣装の様な服に、まるで少女の様な顔立ちの少年。

その少年は駆けていた。少年を追う、決して既存の生物では無い、塊としか形容出来ないような黒い獣から逃げるよう、戦うように。そして何より、彼は虚空を駆けていた。

一  
ノ  
ツ  
ノ  
ツ  
ノ  
ツ

「くッ！　レイジングハート！」

少年の胸元で輝く赤い宝石は鳴動し、少年を護るように現れた光の壁を作り出し獣を阻む。

壁にぶつかつた獣は苦しむように不気味な唸り声を漏らすが、その隙を少年は見逃さなかつた。

少年が掲げる手に呼応する様に  
虚空から緑色の鎖が曾を拘束せん  
と殺到し、

「ジユエルシードツ、封！」

「ツ！？」  
ぐあツ！」「

しかし曾は久空の鉢を引いてせり久空をその長い肉体で吸い升らした。

黒い獸は、吹き飛ばした少年に構わず何処かへ逃げるようになってしまった。

腹部から血を流しながら倒れ伏した少年は、赤い宝石の光に包まれて姿を消した。

少年と全く同じ傷を負っているフェレットが、代わりに倒れ伏して。

フエレット 少年は叫ぶ。音という空気の振動では無く、念話という魔

力の振動を用いて。

全てを始まらせるその声を。

『――助けて』

その夜。二つの大きな出来事が起きた。

空高く異次元の海から降り落ちた二十一個の蒼の願望機。  
ありとあらゆる願いを叶え、しかし歪ませてしまふ歪な宝石。  
この地に争いと災い、そして出会いを齎し、この世界の物語の始まりを告げる星屑の雨。

不屈を冠する石と出逢い、新たな世界を知る少女と、母親の愛をただ求め続ける金色の少女を中心として起こる物語。  
その始まりが。

千差万別数多の可能性を見せるこの物語には、しかし異物は存在する。

極大の異物が。

二つの世界の力、そのどちらにもに属さない、可能性の海から訪れた人間らしい怪物が。

しかし、怪物が一人存在するのでは、物語は語れない。

コインに表と裏が必要な様に、悪には善が対するように、怪物が存在する物語にはやはり怪物を倒さんとする勇者が必要だ。

英雄が必要だ。

そう。それが二つ目に、とある一夜に起こった二つ目の出来事。

それは偶然だろうか必然だろうか。将又あらゆる可能性の海を旅する、彼のかの宝石剣の扱い手による計らいだろうか。

彼――いや彼女が数多の世界の中からこの世界に辿り着いたのは。

元々の赤が、血で紅く汚れた様はその者の辿った道筋を現していた。

「……うツ……此処は……」

その者が目覚めたのは、海鳴市の八束神社の更に山奥。伝承では百鬼夜行、または大妖やぐらが封印されたと謂われる場所だった。

その者は意識を取り戻したと同時に、まるで日課と言わんばかりの緩やかな手つきで周囲と自身の姿を確かめ。

直ぐ様絶句した。

「は……？」

そもそも格好が、汚れ云々以前に奇妙だつた。

ダブダブの服に、大きすぎるボディーアーマー。

その体に間違いなく釣り合わないサイズの服だつたのだから。まるで体が縮んだ様に。

彼女は自身の体がどうなつてゐるかひとしきり確認し、暫く絶句した後近くに落ちていたアタツシユケースを見付けて立ち上がつた。

「……橙子さんの仕業か？ それとも凜か？ 恐らく縮んでいるのは修正力なのだろうが……まあ良い。先ずは寝床を確保しなければな。最悪野宿でも構わんが……この血塗れの格好を何とかするしかあるまい。全く以て、前途多難だな」

アタツシユケースの中身が、魔力の籠つた宝石とかなりの量の魔術礼装である事に、溜め息と感謝の念と現実逃避を抱きながらその者は再び、その白銀の髪を翻しながら歩き始めた。

それは嘗て憧れ、破綻した見果てぬ理想を、自ら被つた道化の様に愚直にもを求める続けるためか。

将又自身の師とも呼べる女性の望む様に、女性が永年研究した成果で示された自らの幸せとなる道を選ぶのか。

それとも――

物語に必要な登場人物は揃つた。さあ、物語を始めよう。  
何、気にすることはない。

これはただ怪物が戯れ。  
少女達が飛び交い。

英雄が抗うだけの物語だ。



アークライト達がこの世界に来てから数ヶ月。 いつの間にか新たな季節がやつて来ていた。

つまりは新学期。

「……三年生か……何時まで俺は小坊やつているのか……」  
「師匠様、時間軸がズレてるから向こうと時間差かなり有るって言つてたもんね」

「まだボロボロじやなかつたな」

「中々スリルあるつて言つてたもんね」

「死徒二十七祖一桁台二人に、飛行可能の英靈が相手だからな……  
スリルぐらいあらア」

そのスリルは、どれだけ才能溢れる魔術師であろうと、間違いなく絶望するレベルである。

玄関前でアークライトとシャーレイは、先日やつて来たアトラクションを楽しんだ後の様な、爽やかな汗を搔いて悪戯坊主のような老魔法使いを思い出していた。

「まさか向こうとの時間軸がズレてるとはな。コツチの数ヶ月が向こうじや数日にもなつて無い……オイ、ゼルレツチ第二魔法シャーレイの系列者。お前は解らなかつたのか？」

「私は第二魔法の中でも『時間旅行』専門。師匠様じやあるまいし、流石に別の並行世界の状況まで解らないよ。そもそも私じや、時間旅行すら完全会得は少なくとも百年掛かるつて」  
「……ま、イイか。正直来年一杯が引き際だろうし。それ以上はゼルレツチも詰むだろ」

死徒二十七祖に魔法使いなんて馬鹿げた属性を併せ持ったジジイでも、同じ死徒二十七祖二体に英靈相手から永遠と逃げ続けるのは簡単ではないだろう。それこそ別の並行世界に逃げない限り。

しかも内一人と一匹は、機動力に事欠かないのだから。

「それまでに心の準備は整えないとな」

「チツ……」

ニヤニヤした笑みをアークライトに向けているシャーレイに、忌々しく舌打ちをするアークライトの顔が、疲労に満ちていたのは見間違いではないだろう。

「……ねえ、アーカーク」

「何」

「どうしてアーカークは第五次聖杯戦争で、ジャンヌさんを喚ばなかったの？」

「…………」

シャーレイが口にした疑問。

それは数年前、桜に令呪が宿つた時に、ライダーを召喚してからずっと抱いていた物だつた。

英靈召喚。

それは死の概念が存在しないアーカークライトが、魔法という反則を除き、亡き最愛の妻であるジャンヌとの会う唯一の方法だろう。

アーカークライトには死の概念が無い。

故にアーカークライトを殺すには、物理的に跡形も無く破壊し尽くす他に無いのだ。

しかしそれは、アーカークライトにとつて“死”ではなく“消滅”という表現が正しい。下手をしたら消滅後、復活する可能性がある。つまり死後が存在しない可能性があるのだ。

かつてアーカークライトは、魔女狩りによつて死亡する約1000万の犠牲者を救うという偉業を成し遂げたが、死後が存在しなければジャンヌの居る英靈の座に辿り着くことすら出来ない。

故にアーカークライト側からジャンヌ・ダルクに会いに行くのはほぼ不可能に近い。

或いは、『アークライト・ブリュンスタッド』という生き物として存在していた■■■として逝くのか。

だからこそ、万能の願望器による英靈召喚は、まさに千載一遇の好機だった筈だ。

それをしなかつたのは――

「俺は令呪を得られなかつたからな。つまりは俺はその権利が無かつたんだよ」

つまり、"世界"は、アークライトを彼女と会わす気が無かつた。ジャンヌ・ダルクは世界の後押しを受けた、言つてしまえば『特別』だ。

それこそ、イレギュラークラスとして『ルーラー』を冠する程に。そもそもその話、アークライトはジャンヌを召喚しなかつたのではなく、出来なかつたのだ。

桜の英靈召喚時でも、触媒は確かにジャンヌの遺品を使つた。しかし召喚されたのは、まるで何かに妨げられるようにライダーたるメデューサだつた。

つまり、修正力。

「おそらくあの戦争でジャンヌを召喚するには、抑止力の直接的な影響を受けない俺が、直接ジャンヌを召喚しなけりや不可能だろう」斯くしてアークライトは令呪を得られず、そして他人から令呪を奪うのと、正史における間桐臘硯のようにサーヴァントを生け贋にサーヴァントを召喚するほどの技術や知識は無い。

「つまり俺が直接令呪を得られなかつた時点で、アイツを召喚するのは無理だつた。それが全てだ」

それで話は終わりだと言うように、アークライトは玄関の扉を開けた。

「……それより、数日前と昨夜のアレの解析はどうなつてる?」

その言葉で、悲しみを帶びていたシャーレイの表情が、魔術師のそれへ変わった。

「……ヤバイよ、アレ。聖杯ほどじゃないけど、おそらく目的は一緒だと思う」

「……面倒だな。そんな物が、あと最低十個以上も墜ちて来るとは……」



「ふう……。こんな物か？」

彼女の居る場所は、かつてアークライトが拠点候補に挙げた、とある古びた無人の洋館だつた。

近隣の住民と土地の所有者に暗示を掛け、無事洋館を手に入れて、アークライトとシャーレイが極めてメンド臭いと一蹴した廃洋館が、新品とまではいかないが少なくとも住宅としてはこれ以上無い物に生まれ変わらせた彼女のスキルは、流石なのだろう。

「これで私も立派な犯罪者だな。魔術協会も聖堂教会も無いと言うのに、この有り様とは」

そう。彼女が警戒すべき二大組織は存在しなかつた。

これ程の一級靈地に魔術協会、または魔術師が見逃す訳がない。そして聖堂教会も。

だが現状はそのどちらも姿は見せず、魔術協会に至つては時計塔に存在するべき総本山も、間接的な調べでは存在しないのだから。

更に彼女の魔術が、効率や効力が以前よりも格段に上がつているという疑問も浮上している。

まるで神秘を彼女がほぼ独占しているかのように。

魔術はその『秘儀』を知る人間が増えるほど、その神秘性を失う。

逆に言えば、魔術を知る者が少なければ少ないほど、扱う者が少ないれば少ないほどその力は増していく。

故に魔術師は自分の魔術を秘匿するのだ。

この事から予想するに、下手をすれば魔術そのものが存在しない可能性がある。

しかし直ぐ様安心は出来なかつた。彼女の懸念すべき事は幾つかあつた。

勿論数多くあるが、その中でも挙げるならば二つ。

一つは、地脈として魔術師の工房を造るにあたつて、彼女が今居る洋館以外にも三つ存在しているが、この三つ目が問題だつた。

地脈を辿つて行くも、その場所に辿り着けない。

行こうとしてもいつの間にか通り過ぎてしまう。

「アレは一体……？ 暗示が掛かつた様子も、結界が張られている様子も無いと言うのに……」

それがアークライトが造つた異界による効果なのは、今の彼女は知るよしも無い。

そしてもう一つ。彼女がこの世界に訪れたすぐに、空から莫大な魔力を秘めた何かが多数落ちてきたこと。

此方はハツキリ言つて洒落になら無い。一つ一つが最低町一つ軽く吹き飛ばせる魔力の塊が、しかも複数一つの町に落ちてきたのだ。これは彼女の信念からも、神秘を行使する者としても見過せざる話では無い。

「取り敢えず……自分の分相応な事をするか……

——そしてここに、嘗てアークライトが苦しんだ事と同じ状況に陥つている人間が居た。

「学校か…………何でさ」

高町なのはは魔法少女である。

別に思春期特有の妄想でも、詐欺師まがいの孵卵器と契約した訳でもない。

切つ掛けは夢。そして傷付いたフェレットを助けてから、彼女の物語は始まった。

過去に滅んだ超高度文明の遺物。地球に落ちた、そのどんな願いでも叶えてしまう宝石、計21個のジュエルシード。

それによつて発生した暴走体という名の化物。

それらを鎮圧し、ジュエルシードを回収する為に異世界からやつて来た魔導師との出会いが、彼女の運命を変えた。

ジュエルシードを発掘。回収する為にやつて来た異世界の住人であるユーノ・スクライア。

彼は暴走体との戦いで浅くない傷を負つてしまい、ジュエルシードの回収が困難な状態に陥つたのだ。

そんな時、なのはの存在が彼を助けた。

魔力の温存の為にフェレットと化した傷付いた彼の、魔力を持つ人間のみが聞こえる救援をなのはが耳にし、糾余曲折の末、なのはが魔導師となることで助けたのだ。

魔法少女の誕生である。

そして何より、なのはは才能に溢れていた。

一度目の、魔導師となつた直後の戦闘で空を飛び、初心者とは思えないほどの強度の魔力障壁を張り、ユーノでは出来なかつた暴走したジュエルシードモンスターの封印もやつてのけた。

なんという、まるで魔導師として生まれてきたが如くの才能だ。

またその精神も異常の一言。小学一年生にて、後に友人になるクラスマイトに対し「痛い？ でもあの子はもつと痛いんだよ」とか言つてしまえるほど早熟である。

お前の様な小学生が居るかと。

——故に問おう。

果たして彼女は主人公足り得るだろうか？



アークライトは頭を抱えていた。

『なのはちゃんが魔法少女っぽい格好して魔力砲撃撃つてる』  
という、とある宝石を収集するため動いていたシャーレイからの報告のせいだった。

魔法少女——という単語は、魔法使いゼルレツチに関わりを持つ者に対して共通のトラウマなのだ。

ゼルレツチが魔法使いたる最大の理由『宝石剣ゼルレツチ』の製作の片手間に造り上げた、愉快型魔術礼装『カレイドルビー』が、その元凶である。

並行世界の自分にアクセス、各世界の自分の習得た技能をダウンドロードするという、片手間に作つたにしては非常に高性能。

だが問題は、内蔵されている電子精霊だつた。

そのあまりに奔放。言つてしまえば問題児的思考に、『魔法少女力』という意味不明な選考基準で無差別に所有者<sup>マスター</sup>を選別し、例え一般人であろうと詐欺師的手口で強引に契約するという、ぶつちやけ極めてウツザイのだ。

更に問題なのは、この契約した際に契約者に対しても魔術装甲という名の、魔法少女っぽい衣装を強制する。

その契約者の年齢に関係無くだ。

小学生程度ならまだ構わないだろうが、高校以降となれば話は別だ。

そんな“良い大人”的女性達にとつてソレは悪夢以外何物でもない。

更に更に問題は、契約直後は思考すら乗っ取られ、魔法少女らしい言動を取つてしまい正気に戻つた女性が羞恥で自殺したくなる程のトラウマを植え付けられるのだ。

言峰父娘に匹敵する人格破綻の精霊の被害は、勿論ゼルレツチと長年交流を持つアークライトにも及んだ。

被害は主にシャーレイと桜。

アルトルージュは、プライミツツの存在故近付いたら噛み殺されるので、ライダーたるメドューサは元女神の英靈故、狙われる事は無かつたが、桜は弁舌戦力的に抗えず、シャーレイは師のゼルレツチの礼装を破壊する事が出来ず抗えなかつたのだ。

これにはアークライトもキレた。

礼装的価値など度外視に本氣で破壊しようと迫るアークライトの追跡劇は、ルビーが逃げた並行世界にまで及んだ程だつた。

その際並行世界で生まれた“天然物の生まれながら完成された聖杯”の少女の物語を無茶苦茶にしたのは、完全な余談である。

そんなアーライト達にとつて、否、あのイカレスステツキに関係した者にとつて『魔法少女』は鬼門なのだ。

「何がどうしてそうなつた……」

『十中八九肩に乗つてるフェレットじやない?』

「学校での念話先がソイツか……。だからって魔法少女はねエだろが」

しかもよりもよつて常連店の次女。クラスメイトでもあり小さな友人である。

「あの腐れポンコツは確認出来たか?」

『ううん。持つてるのはメカメカしい杖っぽいのだし、そもそも魔術体系が根本的に私達の知るモノじゃない。神秘の欠片も無い魔術つて何よ』

魔術とは、神秘によつて奇跡を起こす業だ。

故に魔術を秘匿し、神秘性を高める。

だというのになのはが使つている術式は、まるで計算式の様な科学的產物に感じる。というかそもそも、礼装らしき杖が機械のソレだ。魔術の対局の科学を使つている時点で神秘などある筈がない。

「……しゃあなしだ。例の宝石——フェレット君曰くジュエルシードだつたな、封印処理とやらは出来てるのか？」

『辛うじて。死体や臓物どころか、血みどろの喧嘩も知らない素人っぽいけど』

「当たり前だ。小三がそんなん知つてたら俺は士郎ンとこに力チコミするわ。……取り敢えず監視を続けて、危なくなつたら介入な」

『保護者の意見だねー』

動きは勿論、姿勢が素人なのに魔力量だけは百年に一人か其処らのレベルなのでやつていけてるので質が悪い。

真つ当な魔術師ならば、間違いなくホルマリン漬けにするレベルの素人など、危なつかしさ極まりない。

「フェレット君の動向は？」

『なのはちゃんと終始圧倒されてるよ。やつぱりこの世界でもなのはちゃんとレベルはそう居ないみたい』

「成る程なあ」

『もしあのステッキ確認したら?』

「サーチアンドデストロイ。全戦力でスクラップに変えてやる』

『余波で海鳴市消さないでね。あつ、終わつたみたい。じやつ戻るね』

「おう。御疲れさん」

ドフツ、と念話を終えて部屋のソファーアに倒れ込むアークライトは、テーブルに置かれている三つのジュエルシードを眺めながら溜め息を吐く。

コレ一つに内蔵されている魔力は、聖杯戦争に於けるサーヴァント一体分の魔力とほぼ同等。しかも加えて極めて不安定で、少し衝撃を与えたなら爆発しそうときていてる。

フェレットの話によれば、コレが二十一個。

「日本消し飛ばす氣か？」

つまり、単純計算で冬木の聖杯三個分の魔力。

五百年前のアインツベルンならば喉から手が出るほど欲しがる物だろう。

勿論魔術師にとつて涎モノの代物だが、当時“中身”を用意出来ない為にマキリと遠坂に自分の研究成果を分け合う事になつたアインツベルンに比べられないだろう。

「にしても……コレ造った奴、ワザとやつてんのか？ 態々こんな中途半端な術式……嫌がらせか？」

刻まれてる二つの術式の効果は、アークライトから見てもあまりに杜撰。

一つは恐らく<sup>デコイ</sup>囮なのだろうが、隠してある本来の用途すら、アークライトは勿論魔術師にしてみれば、何故ベストを尽くさなかつたのか、と言いたいだろう。

「しかし、科学的な魔術か……」

アークライトは最近ソレを観たことがある。  
八神邸のマトリック型結界がまさにソレだ。

「あの猫、捕まえて吐かせとけばよかつたかな？」

凄惨な笑みを浮かべながら、アークライトははやてを監視していたであろう猫の使い魔を思い浮かべ、そのせいである猫耳管理局員に怖気が襲つたとかなんとか。  
そんな時だつた。

『魔術師を発見』

撤収を始めていた筈のシャーレイから、そんな念話が聞こえてきたのは。



「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアル20、封印ッ!!」

——それは、なのはが四個目のジュエルシードを学校で封印した夜に姿を現した。

「お疲れ、なのは」

「うん、お疲れ様ユーノ君」

互いを労うその様子は、ファンシーな雰囲気と相俟つて子供向けの物語の魔法少女とそのマスコットだ。

最も、先程ジュエルシードを封印していた手段は魔砲少女と形容すべきものだったが。

「ねえ、ユーノ君。やっぱりこの前のジュエルシードは、他の人が封印したのかな?」

「そうなるんだけど……この町に僕達以外の魔導師が居るとは思えないんだよ、なのは。もし居たとしても、ならなのはに聞こえた僕の念話が聞こえたはずなんだ」

つまりジュエルシードはなのはが魔導師になつた後にこの世界に来た魔導師が封印した可能性が高い。

勿論、ジュエルシードを悪意を以て集めている場合を除くのだが。  
「じゃあさユーノ君。魔導師の人以外にジュエルシードを封印する事つて出来るのかな?」

「うーん、それは無いんじゃないかな? この世界が管理外世界に指定されている理由は質量兵器の事もあるかもしけないけど、一番は魔法技術と次元航行手段の有無なんだよ」

そもそも管理世界に指定されるのは、時空管理局の管理と保護を受けることが承認されることが必要なのである。

承認されるにはユーノが言つた魔法技術と次元航行手段が必要だ。

そして何より、管理局が魔法技術と認知している物は『魔力を消費してプログラムに依存して発動される現象』であり、ファンタジーな神秘ではなく科学である。

この地球に現存する神秘を管理局は認知していない。  
故に――

突如飛んできた『剣』を、『魔力を用いた物品』と直ぐ様思う事が出来なかつた。

「なッ……!?」

「ふえ……?」

一本ではない。合計二十本近くの様々な剣がなのは達の周囲に飛来したのだ。

「上だよなのは！」

ここで逸早く再起動したのは、遺跡発掘で不測の事態も何度か経験しているユーノだつた。

学校の屋上。そこに居たの者を見たなのはの感想は、死神だつた。全身を黒いローブで隠し、顔には骸骨の仮面。周りには様々な形状の剣が護るように並んでいる。

とある平行世界の戦争に参加したことがある者ならば、その姿から『ハサン』という英靈を連想しただろう。

「こんな夜遅くに、君のような子供が一体何をしている？」

問い合わせられた言葉は当たり前のモノだが、しかしその姿には余りに不釣り合い。

故にユーノはなのはに最大限の警戒を促した。

『なのは、気を付けて。封時結界内に居られるつてことは、魔導師だと思う。でもあの剣は明らかに質量兵器だ』

ミツドチルダの影響、つまりは管理局の影響を受けた人間にとつて質量兵器は忌避すべき代物だ。何せ魔法 자체が『クリーンなエネルギーと技術』という売り出しで、管理局の法でも質量兵器の密輸入は

犯罪にすらなつてゐる。

『じゃあ、あの人は悪い人なの？』

『正直分からぬ。でも気を付けて、もしあの人の目的がジユエル  
シードなら……』

「君達が今行つていたのは、コレの封印かね？」

その者が懐から取り出したのは、青い宝石——まさにジュエル  
シードだつた。

「ふむ……、先ず聞くが何故だ？」

「ソレはユーノ君が発掘した物で、とっても危険なんです!!」

は  
——なれば何故君がソレを集めている? 危険なのかな? 二  
レ

「そ、それは……」

【それは僕のせいです】

「ほう、喋ることが出来るのか、その使い魔は」「ぼ、僕は使、魔じやありません！　人間です！」

「えつ、ユーノ君人間なの!?」

「なのは!?」初めて会った時は人間の姿だつたよね！」

はやあー！ まろんがあの夢は出でたが男の子！

高町家男衆とで一悶着あるのは後日のお話。

閑話休題

ユーノはフェレットの姿から、元の民族衣装を着た金髪碧眼の少年に姿を変えた。

「ゴホンッ！……本来、ジュエルシードは僕一人で回収しなければならなかつたんです。でも、僕は暴走体を封印することすら困難でした……」

「それでその子の魔力に目を付けた訳だ」

「……なのはが今危険な事をしているのは、全て僕が原因です。責められるべきは僕一人です。でもつ、今は一刻も速くジュエルシードを回収しないと危険なんです!! お願ひします、貴方の持つてるジュエルシードを渡してくれませんか!?」

発掘したものの責任。九歳の少年が、本来在りはしない責任にかられて異世界へ一人で危険物を回収する。あり得ない話だ。

しかしユーノはソレを自分の義務だと思い込んでいる。何としても、これ以上の被害拡大を防ぐために。

その為に原住民で女の子であるなのはに、自身の無力を呪いながら助けを求めた。

だからこそなのはに警戒を促したユーノ自身が、怪しいこと極まりない目の前の人物にすら無心に懇願した。

しかし、目の前の者はユーノ達が思っていた以上にお人よしだった。

「ならば尚更、君達にコレを渡すわけにはいかない」

「どうしてツ?!」

「君達の様な子供に、そんな危険物を扱わせる訳にはいかないからだ」

「ツ…!!」

そう。ユーノはどれだけ自分の責任を主張した処で、黒尽くめの人には子供が無理をしているようにしか見えなかつたのだ。

「でも、僕はツ…!!」

「ツ、私達は確かに子供かも知れない! でも私にはユーノ君やレジングハートが——」

それでも諦めきれないなのはに、黒尽くめなのは達の知覚を越えて、一瞬で屋上から二人の首に短剣を突き付けた。

なのはが築き上げた、ことジュエルシード撃破におけるほんの小さな自信を粉々に叩き潰した。

「なツ…!!」

「もし私が、ジュエルシードを私欲の為に手に入れるのが目的の外

道ならどうしたんだ？ 私がその気なら君の首は胴から離れていたぞ」

その圧倒的実力差で、黒尽くめは一人を黙らせる。

「こんな言い方は君に酷だろうが、敢えて言わせてもらおう。」

黒尽くめは、その仮面の下の血のような赤い双眸でなのはを貫く。

「君はもう、戦場に立つ必要は無い。全て回収次第、ユーノ。君に返

還しよう」

そう言つて黒尽くめの者は、周りの剣群もろとも姿を完全に消した。

「なのは……？」

「私は……！」

名を聞く暇も余裕も与えられなかつた事が、なのはを挫折させるには十分だつた。

物語にとつて主人公とは何んだろうか？

そもそも主人公とは、物語の中心となり、そして物語を牽引していく人物のことだ。

そして主人公とソレ以外の違いとは何か。

少なくとも、『主人公補正』と『ご都合主義』の有無だけでは無いと思う。

敵の必殺技がギリギリ急所を外れる。

行く度行く度殺人事件に遭遇する。

曲がり角で女子とぶつかる。

敵の気まぐれで生き残る。

「悪運の強い野郎だ」とか言われたり、敵の妹と知り合えたりする。

旅先でバツタリ友達と出会つたり、かつてのライバルが絶体絶命のピンチに通り掛かつたりする。

トーナメントで弱い順に当たつたり、土壇場で逆転の秘策を思い付

いたりする。

等といつた、奇跡の様な偶然が幾度となく起こり、主人公を救つていく。

確かに主人公はそういうものも持っているだろう。成る程そういう主人公も確かにいる筈だ。

だが物語が生まれる条件は、何も劇的や悲劇的でなければならぬことは無い。

そこに物語を語れるだけの登場人物が居るか居ないかだ。  
それさえあれば主人公なんて何人居ようが、それだけ多彩な物語が語れるだけのお話。

故に主人公が死ぬ事を物語は許さない。否、戦う事を強い続ける。ご都合主義や主人公補正はこの結果の一つだろう。

そして主人公の資格とは、別に主人公らしい“強さ”では無い。  
確かにその方がカツコイイだろうし小気味良いかもしれないが、だからといってこの世の主人公達全員にソレを求めるのは酷だろう。  
主人公に定型など無い。主人公はその物語に必要な力や要素を持つているだけで主人公だ。

強さや特異さも要素の一つだろうが、主人公の第一条件では決して無い。

それは、その物語の事件<sup>エピソード</sup>を解決出来る事。

それが最も主人公に必要な条件である。

でなければ、それは主人公以前に物語として成立しないのだから。  
少年探偵江戸川コナンに推理力が無ければ、その物語の主人公になれない様に。

大空翼がサツカーをしなければ、その物語が破綻してしまう様に。  
そうなると別の物語に刷り変わってしまう。

故に物語<sup>エピソード</sup>を惹き付け、尚且つソレを解決出来る者は全て、主人公の資格が有るのだ。

しかし逆に、物語で唯一事件を解決出来るが故に主人公足り得る主人公は、他に自分よりも解決出来る力を持つた者が複数現れた場合――

主人公は、その主人公性を失つてしまふだろう。

# 番外編 i.f. Fourth Holy Gra i l War

その魔法陣は、とある異界の城に存在するその場所一杯に花で包まれた、一つの墓を囲むように描かれていた。

「——素に銀と鉄。

礎に石と契約の大公」

今行われている儀式は、戦争の物だった。

——聖杯戦争。

万物の、ありとあらゆる願いをかなえる万能の願望機たる『聖杯』を奪い合う為の、六十年に一度行われる争い。

その四度目の戦争。

「降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

聖杯を求める七人のマスターと、彼らに召喚され契約した七騎の英靈のコロシアイ。

そして聖杯は、より真摯に自身を望む者を選抜しマスターにする。  
「閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ。 繰り返すつどに五度。 ただ、満たされる刻を破却する」

人ならざる、最早幻想とも呼べる程の美貌を持つ美しい月光色の髪をしたこの男にも、聖杯戦争の参加、『英靈』を召喚し使役する資格たる令呪がその拳に刻まれていた。

そしてこの男も、聖杯を——正確には聖杯戦争参加資格を強く望んでいた。

別にこの男が、生糸のどうしようもない戦争狂な訳ではない。

そして万能の願望機たる聖杯すら、精々オマケ程度にしか思つてなかつた。

「——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。 聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

本来この男には聖杯戦争の参加資格の魔術回路は存在していない。  
ならどうやつて聖杯に選ばれ、令呪を得られたのか。

『足りないのならば他から補うのが魔術師』という言葉から、その男は自身を狙う魔術師から魔術回路そのものを奪い取ったのだ。

元々刺客たる魔術師は後を絶たないので、結果数分千人分もの魔術回路を取り込むことに成功した。

勿論ソレを実際に魔術に使うつもりは無い。魔力を魔術回路を用いずに使用出来るこの男には無用の長物だ。用を済ませば自分たつた一人の眷属にでもやるつもりだった。

全ては、この英靈召喚一つの為に。

「誓いを此処に。

私は常世総ての善と成る者、私は常世総ての悪を敷く者」

死の概念が存在しない虹色の瞳を持つ月の主にて、非常識を蹂躪する理不尽たるこの男が、最愛の妻に会う唯一の方法。

「汝三大の言靈を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――

!!!

これは、唯のありふれた if の物語。無限に存在する可能性の一つの、怪物が始まりの悲劇をしつちやかめつちやか荒らして回る、ただそれだけの物語。

怪物とは、本来そういう存在なのだから。

光が召喚陣から溢れ出し、同時に凄まじい魔力の奔流が流れる。

「――お久しき、ジャンヌ」  
「――ええ、久しぶりです。アーケ」

その物語は、そんな気軽に取りから始まった。



「反則だらうて」

「うるせエ」

第四次聖杯戦争が行われる一ヶ月前。

イギリスの時計塔。魔術協会総本山と言える場所のとある一室に、一人の老人と一人の青年がいた。

老人の名は、キシュア・ゼルレツチ・シユバインオーグ。

第二の魔法使い。死徒二十七祖第四位。

魔導元帥。宝石翁。万華鏡。カレイドスコープなど、様々な異名を持つた、並行世界を旅する世界で現存する四人の魔法使いの一人が、魔術協会には秘密でそこにいた。

しかしもう一人の青年も負けてはいない。

ゼルレツチが滅ぼした、当時世界の頂点。

「月世界の王」朱い月のブリュンスタッド——その完全なる次世代機。

現死徒二十七祖第三位、「タイプ・ムーン」「月のアリストテレス」。朱い月亡き後、月自らが生み出した世界最大のバグ。

自称人類の隣人。原初の一、アルティミット・ワン緋アーフクライトい月のブリュンスタッド。

何故客観的人類の敵の頂点と、客観的魔術師の頂点が一同に会しているかというと、

「まさかお主に令呪が宿るとは……此度で聖杯戦争は終わつたな」

「酷くないか?」

「お主自分がどんな存在か判つとののか?」

「たこ焼き屋のアルバイター?」

そんなことやつてたのかオマエ、と裏を知る人間は勿論、同じ死徒二十七祖のアルドルージュ・ブリュンスタッド第九位でも卒倒する様な言動を取るアークライトの右手には、確かに月の形を模した令呪が刻まれていた。

アークライトは、言ってしまえば星の触覚たる真祖の原型。神靈すらも屠れる文字通り化物。

召喚された英靈を戦闘機に例えるなら、アークライトが聖杯戦争に参戦すると言うのは戦闘機同士の戦いにフリー・ダムガンダムをブチ

込むに等しい暴挙なのである。

何処に折角召喚した英靈より遙かに強い、天災とも呼べる存在を相手にしたい魔術師が居るのだ。

「今年はおそらく60年周期故、詳しいことは解らぬがもうじき聖杯戦争が始まる。聖杯に望む願いがあるのなら、今から準備をしても良いだろう」

「そうだな。魔法陣やら呪文やら用意しないといけないからな。そちら全然分からんし」

しかしアーライトには決定的に足りないものがある。  
知識が足りない。技術が足りない。技量が足りない。

それらを補う為に、一体何をすれば良いのか。

「——というわけで、間桐家を乗っ取ります」

そうだ、冬木行こう。

数日後。聖杯戦争御三家の一角が、人知れず消滅した。



もしも――。

それは誰しも思うことである。

一般人だろうと魔術師であろうと英靈であろうと化物であろうと。

もしも聖杯が汚れなければ、聖杯戦争はここまで歪まなかつたように。

もしも衛宮切嗣が正義の味方を夢見なければ、そもそもアインツベルンに婿入りしなかつたように。

もしも言峰綺礼が人格破綻者でなければ、そもそも聖杯に選ばれなかつたように。

もしも遠坂時臣が魔術師らしくない人格であれば、あそこまで悲惨な最後にならなかつたように。

もしもウエイバー・ベルベットが聖遺物を盗まなかつたら、征服王

に導かれることがなかつたように。

もしも間桐雁夜が遠坂葵に惚れなければ、幸せな人生を送れたかも  
しれないのに。

もしも雨生龍之介が殺人鬼で無ければ、何の罪もない子どもたちが  
無残に殺されることは無かつたのに。

これは、そんなありえない i f の物語。

「ほう？」 間桐に何用かな御じツ!?

「ハアイ。キモ過ぎなんで聖杯戦争とそれに関する魔術の知識をレ  
ポートに纏めてから死ね」

間桐桜は十年間の苦しみに絶望することは無く、

「ふむ、折角サーヴァントがこんなに集まってるんだ。ここ消し飛  
ばせば勝利確定じゃね?」

「「「「えつ」」」

そもそも殺人鬼はただの殺人鬼で終わり、青髭のが召喚されること  
も無く、

「言峰璃正。私は『裁定者ルーラー』として貴方を監督役に認めるわけにはい  
かない」

言峰璃正は殺されることなく、自らの神に近い聖処女に裁かれ、  
「二度も言わんぞセイバー。お前の願いは現在を生きる一個の存在  
として、絶対に認めない」

そしてセイバーは己の願望を否定される。

「聖杯汚れてるんだ」

「はい」

「じゃ、壊そうか」

「――はい」

鍊鉄の英雄は生まれない、五度目の戦争が起きないそんな物語。

